藤村詩集

春陽堂版

藤村詩集

島崎藤村著

春陽堂版

藤村詩集

藤村詩集

藤村詩集

藤村詩集

藤村詩集

藤村詩集

一

齋陽堂

藤村詩集

島崎藤村著

東京
春陽堂版

藤村詩集

著村藤崎島

東京

春陽堂版

合本詩集初版の序

遂に、新しき詩歌の時は來りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばゝり、いづれも明光と新聲と空想とに醉へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。

傳說はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帶びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり。過去の壯大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穩實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりきされどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頰をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるをわれも描き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。

詩歌は靜かなるところにて思ひ起したる感動なり

とかやげにわが歌ぞおぞき苦鬪の告白なる。なげきと。わづらひとは、わが歌に殘りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に勵まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か舊き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじゞ新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

藝術はわが願ひなり。されどわれは藝術を輕く見たりき。むしろわれは藝術を第二の人生と見たりき。ま

た第二の自然とも見たりき。

あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの卷とはなれり。われは今、青春の記念として、かゝるおもひでの歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧げむとはするなり。

明治三十九年の夏

四卷合本成るの日

藤村

合本第十六版の序

はじめて私が第一の詩集を公にした日から數へると十六年を經た今日に成つて、更に斯の書の改訂本を出すといふことは自分ながら意外に感ずる。過る十六年は私の個人としての生涯を變へたばかりでなく詩歌の歷史から言つてもさう短い月日では無かつた——今日まで斯の詩集が讀まれて來たといふことすら、私には意外である。

二十五六といふ青年時代が二度と私には來ないやうに、斯の詩集も私には二冊とは無いものだ。それを

思ふと斯の詩集を作つた當時のこともいくらか書きつけて置きたい。

明治二十九年の秋、私は仙臺へ行つた。あの東北の古い靜かな都會で私は一年ばかりを送つた。私の生涯はそこへ行つて初めて夜が明けたやうな氣がした。私は仙臺の客舍で書いた詩稿を毎月東京へ送つて、その以前から友人同志で出して居た雜誌「文學界」に載せた。それを集めて公にしたのが私の第一の集だ。「若菜集」は私の文學生涯に取つての處女作とも言ふべきものだ。その頃の詩歌の領分は非常に狹い不自由なもので、自分等の思ふやうな詩歌はまだ〳〵遠い先の方に待つて居るやうな氣がしたが、兎も角も

先蹤を離れやう、詩歌といふものをもつと〳〵自分等の心に近づけやうと試みた。默し勝ちな私の口唇はほどけて來た。

心の宿の宮城野よ
亂れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聽き
悲み深き吾目には
色なき石も花と見き

（若菜集――「草枕」）

私が一生の曙は斯樣な風にして開けて來た。

三十一年の夏、郷里の木曾へ旅して、姉の家で「夏草」の全部を書いた。「夏草」は單行本として公にした。

三十二年の四月、信州の小諸へ行つて、そこで私は復た詩作を始め、東京のいろいろな雜誌へ寄稿した。

「落梅集」はあの山の上へ住むやうに成つてから一年ばかりの間に作つた歌を集めた。「落梅集」を公にしたのは三十三年であつた。丁度足掛五年ばかり――私が二十五から二十九まで――のことが斯の詩集の中にある。私は幾度か挫折したり、落膽したりした。しかし大體に於いて、自分の取つた道を間違へなかつたつもりだ。

私は今、斯の書が改裝されて、もう一度讀まれる日の

あることを思つて見る。自分の着けて來た小さな足跡は斯の古い木の葉のやうな詩集の中に僅かながらにも殘つて居る。

大正元年の冬

著者

改刷詩集のはしがき

佛蘭西の旅にある頃、私はこの詩集の編み直しを思ひ立つた――若かりし日のおもひでにもと、全部の改刷を機として今ここに公にするのが則ちそれである。

この詩集の舊本は順を追ふて出版した卷々の合本であつた。したがつて一冊の集としては不完全なところが多かつた。この新本では歌の順序も成るべく創作の時に隨ひ、題目もあるものは改めあるものは加へ、すべてこの詩集を書いた時の心持に近づけることを主とした。

舊本は分けて四卷としてあつた。この詩集の改刷に際し、「一葉舟」を「春やいづこに」と改めて、第二卷の「夏草」のうちに納めた。新本は「若菜集」、「夏草」、「落梅集」の三卷である。

大正六年春

著者

目次

合本詩集初版の序……
同第十六の序……
改刷詩集のはしがき……

若菜集

一 秋の思

秋……四
初戀……六
狐のわざ……八
髪を洗へば……九
君がこゝろは……一一
傘のうち……一三

秋に隱れて……一五
知るや君……一六
秋風の歌……一八
雲のゆくへ……二三
小詩二首……二三
强敵……二七
別離……二九
望鄕……三三
六人の處女
おえふ……三六
おきぬ……四一
おさよ……四四
おくめ……五〇
おつた……五四
おきく……五九

三　生のあけぼの

序章……六六
春
一　誰か思はん……七七
二　あけぼの……七八
三　春は來ぬ……八〇
四　眠れる春よ……八三
五　うてや鼓……八五
小詩……八七
明星……八九
潮音……九二
醉歌……九四
二つの聲……九七
哀歌……一〇〇

四　深林の逍遙、其他

深林の逍遙……一一〇
母を葬るの歌……一二五

合唱

一 晴香……一二九
二 蓮花舟……一三七
三 葡萄の樹のかげ……一四一
四 高樓……一四六
棲の音……一五三
かもめ……一五三
流星……一五四
君と遊ばん……一五五
雲の夢……一五六
東西南北……一五七
懐古……一五八
白壁……一六二
四つの袖……一六三
天馬……一六五
鶏……一八一

葡萄栗鼠の木彫を觀て……一九一

夏草

一 春やいづこに
春やいづこに……一九六
鷲の歌……一九八
銀河……二〇四
白磁花瓶賦……二〇七
きりぐす……二一八
二 新潮
新潮……二二二
野路の梅……二二六
晩春の別離……二二八
月光五首……二四七
曉の誕生……二六一

終焉の夕……二六七
うぐひす……二七二
かりがね……二七五
わすれ草をよみて……二七八
高山に登りて遠く望むの歌……二八四
二つの泉……二八七
天の河二首……二九〇
婚姻の祝の歌……二九七

三　農夫

農夫……三〇六
序の歌……三〇八
上のまき……三一四
下のまき……三四九

落梅集

一　千曲川旅情の歌
小諸なる古城のほとり……三八八
千曲川のほとりにて……三九〇
勞働
一　朝……三九二
二　晝……三八六
三　暮……四〇〇
常盤樹……四〇四
寂寥……四〇九
爐邊……四一〇
二　胸より胸に
めぐり逢ふ君やいくたび……四一四
あゝさなり君のごとくに……四一六
思より思をたどり……四一八
吾戀は河邊に生ひて……四二〇
吾胸の底のこゝには……四二一

君こそは遠音に響く……四三四
心をつなぐしろかねの……四三六
黄昏……四三八
枝うちかはす梅と梅……四三九
罪なれば物のあはれを……四四二
風よ静かにかの岸へ……四四四

三　壯年

壯年
一　埋木……四四八
二　告別……四五〇
三　佯狂……四五三
四　草枕……四五七
五　幻境……四五八
六　邂逅……四六三

四　椰子の實、其他

椰子の實……四六八
浦島……四七〇
舟路……四七二
海邊の曲……四七四
響りん〳〵音りん〳〵……四七五
悪夢……四七九
夏の夢……四八六
蟹の歌……四八八
鳥なき里……四九〇
藪入……四九三
風をあはれむ……四九八

若菜集

こゝろなきうたのしらべは
ひとふさのぶだうのごとし
なさけあるてにもつまれて
あたゝかきさけとなるらむ

ぶだうだなふかくかゝれる
むらさきのそれにあらねど
こゝろあるひとのなさけに
かげにむくふさのみつよつ

そはうたのわかきゆゑなり
あぢはひもいろもあさくて
おほかたはかみてすつべき
うたゝねのゆめのそらでと

一　秋の思

秋

秋は來ぬ　秋は來ぬ
一葉は花は露ありて
風の來て彈く琴の音に
青き葡萄は紫の
自然の酒とかはりけり

秋は來ぬ　秋は來ぬ
おくれさきだつ秋草も
ひなた夕霜のおきどころ

笑ひの酒を悲みの
盃にこそつぐべけれ

秋は來ぬ　秋は來ぬ
くさきも紅葉するものを
たれかは秋に醉はざらん
智惠あり顏のさみしさに
君笛を吹けわれはうたはむ

初戀

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の實に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの

その髪の毛にかゝるとき
たのしき戀の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまうこそこひしけれ

狐のわざ

庭にかくるゝ小狐の
人なきときに夜いでゝ
秋の葡萄の樹の影に
しのびてぬすむつゆのふさ

戀は狐にあらねども
君は葡萄にあらねども
人しれずこそ忍びいで
君をぬすめる吾心

髪を洗へば

髪を洗へば紫の
小草のまへに色みえて
足をあぐれば花鳥の
われに隨ふ風情あり

目にながむれば彩雲の
まきてはひらく繪卷物
手にとる酒は美酒の
若き愁をたゝふめり

耳をたつれば歌神の

きたりて玉の簫を吹き
口をひらけばうたびとの
一ふしわれはこひうたふ

あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ
その涙にはおよばじな

君がこゝろは

君がこゝろは　蟋蟀の
風にさそはれ　鳴くごとく
朝影清き　花草に
惜しき涙をそゝぐらむ

それかきならす玉琴の
一つの絲のさはりさへ
君がこゝろにかぎりなき
しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは觸れやすき

君が優しき心もて
かくばかりなる吾こひに
觸れたまはぬぞ恨みなる

傘のうち

二人してさす一張の
傘に姿をつゝむとも
情の雨のふりしきり
かわく間もなきたもとかな

顔と顔とをうちよせて
あゆむとすればなつかしや
梅花の油黑髪の
亂れて匂ふ傘のうち

戀の一雨ぬれまさり

ぬれてこひしき夢の間や
染めてぞ燃ゆる紅絹うらの
雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ
しばし情を捨てよかし
いづこも戀に戯れて
それ忠兵衛の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ
秋の入日の照りそひて
傘の涙を乾さぬ間に
手をとりて行きて歸らじ

秋に隱れて

わが手に植えし白菊の
おのづからなる時くれば
一もと花の暮陰に
秋に隱れて窓にさくなり

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥の
聲にもれくる一ふしを
知るや君

深くも澄める朝潮の
底にかくるゝ眞珠を
知るや君

あやめもしらぬやみの夜に
靜にうごく星くづを
知るや君

まだ彈きも見ぬおとめごの
胸にひそめる琴の音を
知るや君

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に
尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲の
飛びて行くへも見ゆるかな

暮影高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に
そのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉巣に隠る

ふりさけ見れば青山も
色はもみぢに染めかへて
霜葉をかへす秋風の
空の明鏡にあらはれぬ

清しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
さびしいかなや秋風の
かのもみぢ葉にきたるとき

道を傳ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂ふ秋風に
飄り行く木の葉かな

朝羽ちふる鷲鷹の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に聲あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の
秋の百葉を落すとき

人は利劍を振へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世をのゝしるも
聲はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も
息吹まどはす秋風よ
世をかれ〳〵となすまでは
吹きも休むべきけはひなし

あゝうらさびし天地の
壺の中なる秋の日や
落葉と共に飄る
風の行衛を誰か知る

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠の花を分け
空ながむれば行く雲の
更に祕密を聞くかな

小詩二首

一

ゆふぐれしづかに　ゆめみんとて
よのわづらひより　しばしのがる
きみよりほかには　しるものなき
花かげにゆきて

こひを泣きぬ
すぎこしゆめぢを
　おもひみるに
こひこそつみなれ
　つみこそこひ
いのりとつとめも
　このつみゆゑ
たのしきそのへと
　われはゆかじ
なつかしき君と
　てをたづさへ

くらき冥府まで
　かけりゆかん

二

しづかにてらせる
　月のひかりの
などか絶間なく
　ものおもはする
さやけきものかげ
　こゝろはなくとも
みるひとの胸に
　忍び入るなり
なさけは説くとも

なさけをしらぬ
うきよのほかにも
朽ちゆくわがみ
あかさぬおもひと
この月かげと
いづれか聲なき
いづれかなしき

強敵

一つの花に蝶と蜘蛛
小蜘蛛は花を守り顔
小蝶は花に醉ひ顔に
舞へども〳〵すべぞなき

花は小蜘蛛のためならば
小蝶の舞をいかにせむ
花は小蝶のためならば
小蜘蛛の糸をいかにせむ

やがて一つの花散りて

小蜘蛛はそこに眠れども
羽翼も輕き小蝶こそ
いづこともなくうせにけれ

別離

人妻をしたへる男の山に登り其女の家を望み見てうたへるうた

誰かとめん旅人の
あすは雲間に隱るゝを
誰か聞くらん旅人の
あすは別れと告げましを

清き戀とや片し貝
われのみものを思ふより
戀はあふれて濁るとも
君に涙をかけましを

人妻戀ふる悲しさを
君がなさけに知りもせば
せめてはわれを罪人と
呼びたまふこそうれしけれ

あやめもしらぬ憂しや身は
くるしきこひの牢獄より
罪の鞭責をのがれいで
こひて死なんと思ふなり

誰かは花をたづねざる
誰かは色彩に迷はざる
誰かは前にさける見て
花を摘まんと思はざる

戀の花にも戯るゝ
嫉妬の蝶の身ぞつらき
二つの羽もをれ〳〵て
翼の色はあせにけり

人の命を春の夜の
夢といふこそうれしけれ
夢よりもいやいや深き
われに思ひのあるものを

梅の花さくころほひは
蓮さかばやと思ひわび
蓮の花さくころほひは
萩さかばやと思ふかな

待つまも早く秋は來て
わが踏む道に萩さけど
濁りて待てる吾戀は
清き怨となりにけり

望郷

寺をのがれいでたる僧のうたひ
しそのうた

いざさらば
これをこの世のわかれぞと、
のがれいでゝは住みなれし
御寺の藏裏の白壁の
眼にもふたゝび見ゆるかな

いざゝらば
住めば佛のやどりさへ

火炎の宅となるものを
なぐさめもなき心より
流れて落つる涙かな

いざゝらば
心の油濁るとも
ともしびたかくかきおこし
なさけは熱くもゆる火の
こひしき塵にわれは燒けなむ

二—六　人の　處女

おえふ

處女ぞ經ぬるおほかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河をながむれば

水靜かなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の櫻の花影に
われは處女となりにけり

都鳥浮く大川に

流れてそゝぐ川添の
白菫さく若草に
夢多かりし吾身かな

雲むらさきの九重の
大宮内につかへして
清涼殿の春の夜の
月の光に照らされつ

雲を彫め濤を刻り
霞をうかべ日をまねく
玉の臺の欄干に
かゝるゆふべの春の雨

さばかり高き人の世の

耀くさまを目にも見て
ときめきたまふさまくの
ひとのころもの香をかげり

きらめき初むる曉星の
あしたの空に動くごと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天つみそらを渡る日の
影かたぶけるごとくにて
名の夕暮に消えて行く
秀でし人の末路も見き

春しづかなる御園生の

花に隱れて人を哭き
秋のひかりの窓に倚り
夕雲とほき友を戀ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門を出で
けふ江戸川に來て見れば
秋はさみしきながめかな

櫻の霜葉黃に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水靜にて
あゆみは遲きわがおもひ

おのれも知らず世を經れば

若き命に絶えかねて
岸のほとりの草を藉き
微笑みて泣く吾身かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲の
人の處女の身に落ちて
花の姿に宿かれば
風雨に渇き雲に饑え
天翔るべき術をのみ
願ふ心のなかれとて
黑髪長き吾身こそ
うまれながらの盲目なれ
芙蓉を前の身とすれば
泪は秋の花の露

小琴を前の身とすれば
愁は細き糸の音
いま前の世は鷲の身の
處女にあまる羽翼かな

あゝあるときは吾心
あらゆるものをなげうちて
世はあぢきなき浅茅生の
茂れる宿と思ひなし
身は術もなき蟋蟀の
夜の野草にはひめぐり
たゞいたづらに音をたて
うたをうたふと思ふかな

色にわが身をあたふれば

處女のこゝろ鳥となり
戀に心をあたふれば
鳥の姿は處女にて
處女ながらも空の鳥
猛鷲ながら人の身の
天と地とに迷ひぬる
身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮さみしき荒磯の
巖陰われは生れけり

あしたゆふべの白駒と
故郷遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひと

けに狂はしの身なるべき
この年までの處女とは

うれひは深く手もたゆく
むすぼゝれたるわが思ひ

流れて熱きわがなみだ
やすむときなきわがこゝろ

亂れてものに狂ひよる
心を笛の音に吹かん

笛をとる手は火にもえて
うちふるひけり十の指

音にこそ渇け口唇の
笛を尋ぬる風情あり

はけしく深きためいきに
笛の小竹や曇るらん

髪は亂れて落つるとも
まづ吹き入るゝ氣息を聽け

力をこめし一ふしに
黄楊のさし櫛落ちにけり

吹けば流るゝ流るれば
笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節の間も
長き思のなからずや

七つの情聲を得て
音をこそきかめ歌神も

われ喜を吹くときは
鳥も梢に音をとゞめ

怒をわれの吹くときは
瀬を行く魚も淵にあり

われ哀を吹くときは
獅子も涙をそゝぐらむ

われ樂を吹くときは
蟲も鳴く音をやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち歸り

惡をわれの吹くときは
散り行く花も止りて

慾の思を吹くときは
心の闇の響あり

うたへ浮世の一ふしは
笛の夢路のものぐるひ

くるしむなかれ吾友よ
しばしは笛の音に歸れ

落つる涙をぬぐひきて
靜にきゝぬ吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出で
こゝの岸よりかの岸へ
越えましものと來て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてゝ
やむよしもなき胸の火や
鬢の毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし
河波暗く瀨を早み

流れて巖に碎くるも
君を思へば絶間なき
戀の火炎に乾くべし

きのふの雨の小休なく
水嵩や高くまさるとも
よひ〳〵になくわがこひの
涙の瀧におよばじな

しりたまはずやわがこひは
花鳥の繪にあらじかし
空鏡の印象砂の文字
梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは

雄々しき君の手に觸れて
嗚呼口紅をその口に
君にうつさでやむべきや

戀は吾身の社にて
君は社の神なれば
君の祭壇の上ならで
なにゝいのちを捧げまし

碎かば碎け河波よ
われに命はあるものを
河波高く泳ぎ行き
ひとりの神にこがれなん

心のみかは手も足も

吾身はすべて火炎なり
思ひ亂れて嗚呼戀の
千筋の髪の波に流るゝ

おつた

花仄見ゆる春の夜の
すがたに似たる吾命
朧々に父母は
二つの影と消えうせて
世に孤兒の吾身こそ
影より出でし影なれや
たすけもあらぬ今は身は
若き聖に救はれて
人なつかしき前髪の
處女とこそはなりにけれ

若き聖のたまはく
時をし待たむ君ならば
かの柿の實をとるなかれ
かくいひたまふうれしさに
ことしの秋もはや深し
まづその秋を見よやとて
聖に柿をすゝむれば
その口唇にふれたまひ
かくも色よき柿ならば
などかは早くわれに告げこぬ
若き聖のたまはく
人の命の惜しからば
嗚呼かの酒を飲むなかれ
かくいひたまふうれしさに

酒なぐさめの一つなり
まづその春を見よやとて
聖に酒をすゝむれば
夢の心地に醉ひたまひ
かくも樂しき酒ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖のたまはく
道行き急ぐ君ならば
迷ひの歌をきくなかれ
かくいひたまふうれしさに
歌も心の姿なり
まづその聲をきけやとて
一ふしうたひいでければ
聖は魂も醉ひたまひ

かくも樂しき歌ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖のたまはく
まことをさぐる吾身なり
道の迷となるなかれ
かくいひたまふうれしさに
情も道の一つなり
かゝる思を見よやとて
わがこの胸に指ざせば
聖は早く戀ひわたり
かくも樂しき戀ならば
などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ

そゞろあるきのこゝろなく
ふと目に入るを手にとれば
雪より白き小石なり
若き聖のたまはく
智恵の石とやこれぞこの
あまりに惜しき色なれば
人に隠して今も放たじ

おきく

くろかみながく
やはらかき
をんなごゝろを
たれかしる

をとこのかたる
ことのはを
まことゝおもふ
ことなかれ

をとめごゝろの

あさくのみ
いひもつたふる
をかしさや
みだれてながき
髪の毛を
黄楊の小櫛に
かきあげよ
あゝ月ぐさの
きえぬべき
こひもするとは
たがことば
こひて死なんと

よみいでし
あつきなさけは
誰がうたぞ
みちのためには
ちをながし
くにゝは死ぬる
をとこあり
治兵衛はいづれ
戀か名か
忠兵衛も名の
ために果つ
あゝむかしより

こひ死にし
をとこのありと
しるや君

をんなごゝろは
いやさらに
ふかきなさけの
こもるかな

小春はこひに
ちをながし
梅川こひの
ために死ぬ

お七はこひの

ために燒け
高尾はこひの
ために果つ

かなしからずや
清姫は
蛇となれるも
こひゆゑに

やさしからずや
佐容姫は
石となれるも
こひゆゑに

をとこのこひの

たはふれは
たびにすてゆく
なさけのみ
こひするなかれ
をとめごよ
かなしむなかれ
わがともよ
こひするときと
かなしみと
いづれかながき
いづれみじかき

草枕

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巌を出づるごと
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね佗び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらん

われもそれかやうれひかや
野末に山に谷蔭に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

想も薄く身も暗く

残れる秋の花を見て
行くへもしらず流れ行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄りて
朝の黄雲にともなはれ
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか

われは道なき野を慕ひ
思ひ亂れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の宿の宮城野よ
亂れて熱き吾身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は
吹く北風を琴と聽き
悲み深き吾目には
色彩なき石も花と見き

あゝ孤獨の悲痛を

味ひ知れる人ならで
誰にかたらん冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆はれて
身にふりかゝる玉霰
袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風勁く
小川の水の薄氷
氷のしたに音するは
流れて海に行く水か

啼いて羽風もたのもしく

雲に隠るゝかさゝぎよ
光もうすき寒空の
汝も荒れたる野にむせぶ

涙も凍る冬の日の
光もなくて暮れ行けば
人めも草も枯れはてゝ
ひとりさまよふ吾身かな

かなしや醉ふて行く人の
踏めばくづるゝ霜柱
なにを醉ひ泣く忍び音に
聲もあはれのその歌は

うれしや物の音を彈きて

野末をかよふ人の子よ
聲調ひく手も凍りはて
なに門づけの身の果ぞ

やさしや年もうら若く
まだ初戀のまじりなく
手に手をとりて行く人よ
なにを隱るゝその姿

野のさみしさに堪へかねて
霜と霜との枯草の
道なき道をふみわけて
きたれば寒し冬の海

朝は海邊の石の上に

こしうちかけてふるさとの
都のかたを望めども
おとなふものは濤ばかり

暮はさみしき荒磯の
潮を染めし砂に伏し
日の入るかたをながむれど
湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒波の
岩に碎けて散れるとき
かなしいかなや冬の日の
潮とゝもに歸るとき

誰か波路を望み見て

そのふるさとを慕はざる
誰か潮の行くを見て
この人の世を惜まざる

暦もあらぬ荒磯の
砂路にひとりさまよへば
みぞれまじりの雨雲の
落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音
慣れてさみしき吾耳に
怪しやもるゝものゝ音は
まだうらわかき野路の鳥
嗚呼めづらしのしらべぞと

聲のゆくへをたづぬれば
絲の羽もまた弱き
それも初音か鶯の

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども
若菜の萠えて色青き
こゝちこそすれ砂の上に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香ぞする海の邊に

磯邊に高き大巖の

うへにのぼりてながむれば
春やきぬらん東雲の
潮の音遠き朝ぼらけ

春

一　たれかおもはむ

たれかおもはむ鶯の
涙もこほる冬の日に
若き命は春の夜の
花にうつろふ夢の間と
あゝよしさらば美酒に
うたひあかさん春の夜を
梅のにほひにめぐりあふ
春を思へばひとしれず

からくれなゐのかほばせに
流れてあつきなみだかな
あゝよしさらば花影に
うたひあかさん春の夜を

わがみひとつもわすられて
おもひわづらふこゝろだに
春のすがたをとめくれば
たもとにゝほふ梅の花
あゝよしさらば琴の音に
うたひあかさん春の夜を

二　あけぼの

紅細くたなびける
雲とならばやあけぼのゝ
　雲とならばや
やみを出でゝは光ある
空とならばやあけぼのゝ
　空とならばや

春の光を彩れる
水とならばやあけぼのゝ
　水とならばや

鳩に履まれてやわらかき
草とならばやあけぼのゝ
　草とならばや

三　春は來ぬ

春はきぬ
　春はきぬ
初音やさしきうぐひすよ
こぞに別離を告げよかし
谷間に殘る白雪よ
葬りかくせ去歲の冬
春はきぬ
　春はきぬ
さみしくさむくことばなく
まづしくくらくひかりなく
みにくゝおもくちからなく
かなしき冬よ行きねかし
春はきぬ
　春はきぬ
淺みどりなる新草よ
とほき野面を畫けかし
さきては紅き春花よ
樹々の梢を染めよかし
春はきぬ
　春はきぬ
霞よ雲よ動ぎいで
氷れる空をあたゝめよ
花の香おくる春風よ

眠れる山を吹きさませ
春はきぬ　春はきぬ
春をよせくる朝汐(あさじほ)よ
蘆の枯葉(かれは)を洗ひ去れ
霞に醉へる雛鶴よ
若きあしたの空に飛べ
春はきぬ　春はきぬ
うれひの芹の根を絶えて
氷れるなみだ今いづこ
つもれる雪の消えうせて
けふの若菜と萌えよかし

四　眠れる春よ

ねむれる春よ　うらわかき
かたちをかくすことなかれ
たれこめてのみけふの日を
なべてのひとのすぐすまに
さめての春のすがたこそ
また夢のまの風情なれ

ねむけの春よ　さめよ春
さかしきひとのみざるまに
若紫の朝霞
かすみの袖をみにまとへ

はつねうれしきうぐひすの
鳥のしらべをうたへかし

ねむけの春よさめよ春
ふゆのこほりにむすぼれし
ふるきゆめぢをさめいでて
やなぎのいとのみだれがみ
うめのはなぐしさしそへて
びんのみだれをかきあげよ

ねむけの春よさめよ春
あゆめばたにの早わらび
したもえいそぐ汝があしを
かたくもあげよあゆめ春
たえなるはるのいきを吹き

こぞめの梅の香にゝほへ

五 うてや鼓

うてや鼓の春の音
雪にうもるゝ冬の日の
かなしき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり

ひけばこぞめの春霞
かすみの幕をひきとぢて
花と花とをぬふ糸は
けさもえいでしあをやなぎ

霞のまくをひきあけて
春をうかゞふことなかれ
はなさきにほふ蔭をこそ
春の臺（うてな）といふべけれ

小蝶よ花にたはふれて
優しき夢をみては舞ひ
醉ふて羽袖もひら〳〵と
はるの姿をまひねかし

綠のはねのうぐひすよ
梅の花笠ぬひそへて
ゆめ靜なるはるの日の
しらべを高く歌へかし

小詩

くめどつきせぬ
わかみづを
きみとくまゝし
かのいづみ

かわきもしらぬ
わかみづを
きみとのまゝし
かのいづみ

かのわかみづと

みをなして
はるのこゝろに
わきいでん

かのわかみづと
みをなして
きみとながれん
花のかげ

明星

浮べる雲と身をなして
あしたの空に出でざれば
などしるらめや明星の
光の色のくれなゐを

朝の潮と身をなして
流れて海に出でざれば
などしるらめや明星の
清みて哀しききらめきを

なにかこひしき曉星の

空しき天の戸を出でゝ
深くも遠きほとりより
人の世近く來るとは

潮の朝のあさみどり
水底深き白石を
星の光に透かし見て
朝の齡を數ふべし

野の鳥ぞ啼く山河も
ゆふべの夢をさめいでゝ
細く棚引くしののめの
姿をうつす朝ぼらけ

小夜には小夜のしらべあり

朝には朝の音もあれど
星の光の絲の緒に
あしたの琴は靜なり

まだうら若き朝の空
きらめきわたる星のうち
いといと若き光をば
名けましかば明星と

潮音

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
しらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる

はるのしほのね

醉歌

旅と旅との君や我
君と我とのなかなれば
醉ふて袂の歌草を
醒めての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間に
樂しき春は老いやすし
誰が身にもてる寶ぞや
君くれなゐのかほばせは

君がまなこに涙あり

君が眉には憂愁あり
堅く結べるその口に
それ聲も無きなげきあり

名もなき道を說くなかれ
名もなき旅を行くなかれ
甲斐なきことをなげくより
來りて美き酒に泣け

光もあらぬ春の日の
獨りさみしきものぐるひ
悲しき味の世の智惠に
老いにけらしな旅人よ

心の春の燭火に

若き命を照らし見よ
さくまを待たで花散らば
哀しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く
君の行衛はいづこぞや
琴花酒のあるものを
とゞまりたまへ旅人よ

二つの聲

朝

たれか聞くらん朝の聲
眠と夢を破りいで
彩なす雲にうちのりて
よろづの鳥に歌はれつ
天のかなたにあらはれて
東の空に光あり
そこに時あり始あり
そこに道あり力あり
そこに色あり詞あり

そこに聲あり命ありたひつゝ
そこに名ありとうたにかけり
みそらにあがり地にともに
のこんの星ともろとくるゝ
光のうちに朝ぞ隱

暮

たれか聞くらん暮の聲
霞の翼露の帶
煙の衣露の袖
つかれてなやむあらそひを
闇のかなたに投げ入れて
夜の使の蝙蝠の
飛ぶ間も聲のをやみなく

こゝに影あり迷ひあり
こゝに夢あり眠あり
こゝに闇あり休息あり
こゝに永きあり遠きあり
こゝに死ありとうたひつゝ
草木にいこひ野にあゆみ
かなたに落つる日とゝもに
色なき闇に暮ぞ隱るゝ

哀歌

中野逍遙をいたむ

『秀才香骨幾人憐、秋入長安夢愴然、琴臺舊譜壚前柳、風流銷盡二千年』、これ中野逍遙が秋怨十絶の一なり。逍遙字は威卿、小字重太郎、豫州宇和島の人なりといふ。文科大學の異材なりしが年僅かに二十七にしてうせぬ。逍遙遺稿正外二篇、みな紅心の餘唾にあらざるはなし。左に掲ぐるはかれの清怨を寫せしもの、『寄語殘月休長嘆、我輩亦是艶生涯』、合せかゝけてこの秀才を追慕するのこころをとゞむ。

中野逍遙

思君九首

思君我心傷　思君我容瘁
中夜坐松蔭　露華多似涙

思君我心悄　思君我腸裂
昨夜涕涙流　今朝盡成血

示君錦字詩　寄君鴻文冊
忽覺筆端香　窗外梅花白

爲君調綺羅　爲君築金屋
中有鴛鴦圖　長春夢百祿

贈君名香篋　應記韓壽思

休將秋扇掩　明月照眉痕
贈君双臂環　寶玉價千金
一鐫不乖約　一題勿變心
訪君過臺下　清宵琴響搖
佇門不敢入　恐亂月前調
千里囀金鶯　春風吹綠野
忽發頭屋桃　似君三兩朶
嬌影三分月　芳花一朶梅
潭把花月秀　作君玉膚堆

かなしいかなや流れ行く

水になき名をしるすとて
今はた殘る歌反古の
ながき愁ひをいかにせむ

かなしいかなやする墨の
いろに染めてし花の木の
君がしらべの歌の音に
薄き命のひゞきあり

かなしいかなや前の世は
みそらにかゝる星の身の
人の命のあさぼらけ
光も見せでうせにしよ

かなしいかなや同じ世に

生れいでたる身を持ちて
友の契りも結ばずに
君は早くもゆけるかな

すゞしき眼つゆを帶び
葡萄のたまとまがふまで
その面影をつたへては
あまりに妬き姿かな

同じ時世に生れきて
同じいのちのあさばらけ
君からくれなゐの花は散り
われ命あり八重葎

かなしいかなやうるはしく

さきそめにける花を見よ
いかなればかくとゞまらで
待たで散るらんさける間も

かなしいかなやうるはしき
なさけもこひの花を見よ
いとといと清きそのこひは
消ゆとこそ聞けいと早く

君し花とにあらねども
いな花よりもさらに花
君しこひとにあらねども
いなこひよりもさらにこひ

かなしいかなや人の世に

あまりに惜しき才なれば
病に塵に悲に
死にまでそしりねたまるゝ

かなしいかなやはたとせの
ことばの海のみなれ棹
磯にくだくる高潮の
うれひの花とちりにけり

かなしいかなや人の世の
きづなも捨てゝ嘶けば
つきせぬ草に秋は來て
聲も悲しき天の馬

かなしいかなや音を遠み

流るゝ水の岸にさく
ひとつの花に照らされて
飄り行く一葉舟

四——深林の逍遙、其他

深林の逍遙

力を刻む木匠のうちふる斧のあとを絶え
春の草花彫刻の
鑿の韻もとゞめじな
いろさまゞの春の葉に
青一筆の痕もなく
千枝にわかるゝ赤樟も
おのづからなるすがたのみ
檜は荒し杉直し
五葉は黒し椎の木の
枝をまじゆる白樫や

樅は莖をよこたえて
枝と枝とにもゆる火の
なかにやさしき若楓

山精

ひとにしられぬ
たのしみの
ふかきはやしを
たれかしる

ひとにしられぬ
はるのひの
かすみのおくを
たれかしる

木精

はなのむらさき
はのみどり
うらわかぐさの
のべのいと

たくみをつくす
大機(おほはた)の
梭(をさ)のはやしに
きたれかし

山精

かのもえいづる
くさをふみ
かのわきいづる

みづをのみ

かのあたらしき
はなにゑひ
はるのおもひの
なからずや

木精

ふるきころもを
ぬぎすてゝ
はるのかすみを
まとへかし

なくうぐひすの
ねにいでゝ

ふかきはやしに
うたへかし

あゆめ蘭の花を踏み
ゆけば楊梅、袖に散り
袂にまとふ山葛の
葛のうら葉をかへしては
女蘿の蔭のやまいちご
色よき實こそ落ちにけれ
岡やまつゞき隅々も
いとなだらかに行き延びて
ふかきはやしの谷あひに
亂れてにほふふじばかま
谷に花さき谷にちり
人にしられず朽つるめり

せまりて暗き峽より
やゝひらけたる深山木の
春は小枝のたゝずまひ
しげりて廣き熊笹の
葉末をふかくかきわけて
谷のかなたにきて見れば
いづくに行くか瀧川よ
聲もさびしや白糸の
青き巖に流れ落ち
若き猿のためにだに
音をとゞむる時ぞなき

山精

ゆふぐれかよふ
たびゞとの

むねのおもひを
たれかしる

友にもあらぬ
やまかはの
はるのこゝろを
たれかしる

木精

夜を
なきあかす
かなしみの
まくらにつたふ
なみだこそ

ふかきはやしの

たにかげの
そこにながるゝ
しづくなれ

山精

鹿はたほるゝ
たびごとに
妻こふこひに
かへるなり

のやまは枯るゝ
たびごとに
ちとせのはるに
かへるなり

木精

ふるきおちばを
やはらかき
青葉のかげに
葬れよ

ふゆのゆめぢを
さめいでゝ
はるのはやしに
きたれかし

今しもわたる深山かぜ
春はしづかに吹きかよふ
林の簫の音をきけば
風のしらべにさそはれて

みれどもあかぬ白妙の
雲の羽袖の深山木の
千枝にかゝりたちはなれ
わかれ舞ひゆくすがたかな
樹々をわたりて行く雲の
高き行衛にいざなはれ
千々にめぐれる巌影の
花にも迷ひ石に倚り
流るゝ水の音をきけば
山は危うく石わかれ
削りてなせる青巌に
砕けて落つる飛潭の
湧きくる波の瀬を早み
花やかにさす春の日の
光烱照りそふ水けふり

獨り苔むす岩を攀ぢ
ふるふあゆみをふみしめて
浮べる雲をうかゞへば
下にとゞろく飛潭の
澄むいとまなき岩波は
落ちていづくに下るらん

山　精

なにをいざよふ
むらさきの
ふかきはやしの
はるがすみ
なにかこひしき
いはかげを
ながれていづる
いづみがは

木　精

かくれてうたふ
野の山の
こゑなきこゑを
きくやきみ
つゝむにあまる
はなかげの
水のしらべを
しるやきみ

山　精

あゝながれつゝ
こがれつゝ
うつりゆきつゝ
うごきつゝ

あゝめぐりつゝ
かへりつゝ
うちわらひつゝ
むせびつゝ

木精

いまひのひかり
はるがすみ
いまはなぐもり
はるのあめ

あゝあゝはなの
つゆに醉ひ
ふかきはやしに
うたへかし

ゆびをりくればいつたびも
かはれる雲をながむるに
白きは黄なりなにをかも
もつ筆にせむ色彩の
いつしか淡く茶を帶びて
雲くれなゐとかはりけり
あゝゆふまぐれわれひとり
たどる林もひらけきて
いと靜かなる湖の

岸邊にさける花躑躅
うき雲ゆけばかげ見えで
水に沈める春の日や
それ紅(くれなゐ)の色染めて
雲紫となりぬれば
かげさへあかき水鳥の
春のみづうみ岸の草
深き林や花つゝじ
迷ふひとりのわがみだに
深紫(ふかむらさき)の紅(くれなゐ)の
彩(あや)にうつろふ夕まぐれ

母を葬るのうた

うき雲はありともわかぬ大空の
月のかげよりふるしぐれかな

きみがはかばに
きゞくあり
きみがはかばに
さかきあり
くさはにつゆは
しけくして
おもからずやは
そのしるし

いつかねむりを
　さめいで丶
いつかへりこん
　わがはゝよ

紅羅ひく子も
　ますらをも
みなちりひぢと
　なるものを

あゝさめたまふ
　ことなかれ
あゝかへりくる
　ことなかれ

はるははなさき
　はなちりて
きみがはかばに
　かゝるとも

なつはみだるゝ
　ほたるびの
きみがはかばに
　とべるとも

あきはさみしき
　あきさめの
きみがはかばに
　そゝぐとも

ふゆはましろに
　ゆまじもの
きみがはかばに
　こほるとも
とほきねむりの
　ゆめまくら
おそるゝなかれ
　わがはゝよ

合唱

一　暗香

はるのよはひかりはかりとおもひしを
　しろきやうめのさかりなるらむ

姉

わかきいのちの
　をしければ
やみにも春の
　香に醉はん
せめてこよひは
　さほひめよ

はなさくかげに
うたへかし

妹

そらもゑへりや
はるのよは
ほしもかくれて
みえわかず

姉

よめにもそれと
ほのしろく
みだれてにほふ
うめのはな

はるのひかりの
こひしさに
かたちをかくす
うぐひすよ

はなさへしるき
はるのよの
やみをおそるゝ
ことなかれ

妹

うめをめぐりて
ゆくみづの
やみをながるゝ
せゝらぎや

ゆめもさそはぬ
香なりせば
いづれかよるに
にほはまし

姉

こぞのこよひは
わがともの
うすこうばいの
そめごろも
ほかげにうつる
さかづきを
こひのみゐへる

よなりけり

妹

こぞのこよひは
わがともの
なみだをうつす
よのなごり
かげもかなしや
木下川に
うれひしづみし
よなりけり

姉

こぞのこよひは

わがとものおもひはるのよのゆめや
よたうきものにいでたまふひとめをつゝむよなりけり

妹

こぞのこよひはわがとものそでのかすみのはなむしろ

ひくやことのねたかじほをうつしあはせしよなりけり

姉

わがみぎのてにくらぶればやさしきなれがたなごゝろ
ふるればいとゞやわらかにもゆるかあつくおもほゆる

妹

もゆるやいかに
こよひはと
とひたまふこそ
うれしけれ

しりたまはずや
うめがゝに
わがうまれてし
はるのよを

二　蓮花舟

しは〳〵もこほるゝつゆはちすはの
うきはにのみもとまりけるかな

姉

あゝはすのはな
はすのはな
かげはみえけり
いけみづに

ひとつのふねに
さをさして
うきはをわけて
こぎいでん

妹

かぜもすゞしや
はがくれに
そこにもしろし
はすのはな

こゝにもあかき
はすばなの
みづしづかなる
いけのおも

姉

はすをやさしみ
はなをとり

そでなひたしそ
いけみづに

ひとめもはぢよ
はなかげに
なれが乳房の
あらはるゝ

妹

ふかくもすめる
いけみづの
葉にすれてゆく
みなれざを

なつぐもゆけば

かげみえて
はなよりはなを
わたるらし

姉

荷葉にうたひ
ふねにのり
はなつみのする
なつのゆめ

はすのはなふね
さをとめて
なにをながむる
そのすがた

妹

なみしづかなる
はなかげに
きみのかたちの
うつるかな

きみのかたちと
なつばなと
いづれうるはし
いづれやさしき

三　葡萄の樹のかげ

はるあきにおもひみだれてわきかねつ
ときにつけつゝうつるこゝろは

妹

たのしからずや
はなやかに
あきはいりひの
てらすとき

たのしからずや
ぶだうばの
はごしにくもの
かよふとき

姉

やさしからずや
むらさきの
ぶだうのふさの

かゝるとき

やさしからずや
にいぼしの
ぶだうのたまに
うつるとき

妹

かぜはしづかに
そらすみて
あきはたのしき
ゆふまぐれ

いつまでわかき
をとめごの

たのしきゆめの
われらぞや

姉

あきのぶだうの
いかにやさしく
ふかくとも
てにてをとりて
なれとわかれて
なにかせむ

姉

けにやかひなき
くりごとも
ぶだうにしかじ
ひとふさの
われにあたへよ
ひとふさを
そこにかゝれる
むらさきの

姉

われをしれかし
えだたかみ
とゞかじものを
かのふさは

はかげのたまに
　手はふれて
わがさしぐしの
　おちにけるかな

四高樓

わかれゆくひとをしむとこよひより
　とほきゆめちにわれやまとはん

妹

とほきわかれに
　たえかねて
このたかどのに
　のぼるかな

かなしむなかれ
　わがあねよ
たびのころもを
　とゝのへよ

姉

わかれといへば
　むかしより
このひとのよの
　つねなるを
ながるゝみづを
　ながむれば
ゆめはづかしき

なみだかな

妹

したへるひとの
もとにゆく
きみのうへこそ
たのしけれ

ふゆやまこえて
きみゆかば
なにをひかりの
わがみぞや

姉

あゝはなとりの

いろにつけ
ねにつけわれを
おもへかし

けふわかれては
いつかまた
あひみるまでの
いのちかも

妹

きみがさやけき
めのいろも
きみくれなるの
くちびるも

きみがみどりの
くろかみも
またいつかみん
このわかれ
も

姉

なれがやさしき
なぐさめも
なれがたのしき
うたごゑも

なれがこゝろの
ことのねも
またいつきかん
このわかれ
も

妹

きみのゆくべき
やまかはゝ
おつるなみだに
みえわかず

そでのしぐれの
ふゆのひに
きみにおくらん
はなもがな

姉

そでにおほへる
うるはしき

ながかほばせを
　あげよかし
ながくれなるの
　かほばせに
ながるゝなみだ
　われはぬぐはん

梭の音

梭の音を聞くべき人ば今いづこ
心を糸により初めて
涙ににじむ木綿縞
やぶれし窓に身をなげて
暮れ行く空をながむれば
ねぐらに急ぐ村鴉
連にはなれて飛ぶ一羽
あとを慕ふてかあ〳〵と

かもめ

波に生れて波に死ぬ

情の海のかもめどり
戀の激浪たちさわぎ
夢むすぶべきひまもなき

闇き潮の驚きて
流れて歸るわだつみの
鳥の行衞も見えわかぬ
波にうきねのかもめどり

流星

門にたち出でたゞひとり
人待ち顏のさみしさに
ゆふべの空をながむれば
雲の宿りも捨てはてゝ

何かこひしき人の世に
流れて落つる星一つ

君と遊ばん

君と遊はん夏の夜の
青葉の影の下すゞみ
短かき夢は結ばずも
せめてこよひは歌へかし

雲となりまた雨となる
晝の愁ひはたえずとも
星の光をかぞへ見よ
樂みのかず夜は盡きじ

夢かうつゝか天の川
星に假寢の織姫の
ひゞきもすみてこひわたる
梭の遠音を聞かめやも

晝の夢

花橘の袖の香の
みめうるはしきをとめごは
眞晝に夢を見てしより
さめて忘るゝ夜のならひ
白日の夢のなぞもかく
忘れがたくはありけるものか
ゆめと知りせばなまなかに

さめざらましを世に出でゝ
うらわかぐさのうらわかみ
何をか夢の名殘ぞと
問はゞ答へん日さめては
熱き涙のかわく間もなし

東西南北

男ごゝろをたとふれば
つよくもくさをふくかぜか
もとよりかぜのみにしあれば
きのふは東けふは西
女ごゝろをたとふれば
かぜにふかるゝくさなれや

もとよりくさのみにしあれば
きのふは南けふは北

懷古

天の河原にやほよろづ
ちよろづ神のかんつどひ
つどひいませしあめつちの
始のときを誰か知る

それ大神の天雲の
八重かきわけて行くごとく
野の鳥ぞ啼く東路の
碓氷の山にのぼりゆき

日は照らせども影ぞなき
吾妻はやとこひなきて
熱き涙をそゝぎてし
尊の夢は跡も無し

大和の國の高市の
雷山に御幸して
天雲のへにいほりせる
御輦のひゞき今いづこ

目をめぐらせばさゞ波や
志賀の都は荒れにしと
むかしを思ふ歌人の
澄める怨をなにかせん

春は霞める高臺に
のぼりて見れば けふり立つ
民のかまどのながめさへ
消えてあとなき雲に入る

冬はしぐるゝ九重の
大宮内のともしびや
さむさは雪に凍る夜の
龍のころもはいろもなし

むかしは遠き船いくさ
人の血汐の流るとも
今はむなしきわだつみの
まん〳〵としてきはみなし

むかしはひろき闘が原
つるぎに夢を爭へど
今は寂しき草のみぞ
ばう〳〵としてはてもなき

われ今秋の野にいでゝ
奥山高くのぼり行き
都のかたを眺むれば
あゝあゝ熱きなみだかな

白壁

たれかしるらん花ちかき
高楼われはのぼりゆき
みだれて熱きくるしみを
うつしいでけり白壁に

唾にしるせし文字なれば
ひとしれずこそ乾きけれ
あゝあれ白きこそ白壁に
わがうれひありなみだあり

四つの袖

をとこの氣息のやわらかき
お夏の髪にかゝるとき
をとこの早きためいきの
霰のごとくはしるとき

をとこの熱き手の掌の
お夏の手にも觸るゝとき
をとこの涙ながれいで
お夏の袖にかゝるとき

をとこの黑き目のいろの

お夏の胸に映るとき
をとこの紅き口唇の
お夏の口にもゆるとき

人こそしらぬ嗚呼戀の
ふたりの身より流れいで
けにこがるれど慕へども
やむときもなき清十郎

天馬

序

老は若は越しかたに
文に照らせどまれらなる
奇しきためしは箱根山
彌生の末のゆふまぐれ
南の天の戸をいでゝ
よな〳〵北の宿に行く
血の深紅の星の影
かたくなゝりし男さへ
星の光を眼に見ては

身にふりかゝる凶禍の
天の光とうたがへり
總鳴に鳴く鶯の

にほひいでたる聲をあげ
さへづり狂ふ音をきけば
けにめづらしき春の歌
春を得知らぬ處女さへ
かのうぐひすのひとこゑは
枕の紙のしめりきて
人なつかしきおもひあり
まだ時ならぬ白百合の
籬の陰にさける見て
九十九の翁うつし世の
こゝろの慾の夢を繼ひ
音をだにきかぬ雛鶴の

軒の榎樹に來て鳴けば
寢覺の老姫後の世の
花の臺に泣きまどふ
空にかゝれる星のいろ
春さきかへる夏花やて
是わざはひにあらずして
よしや光といへるあり
なにを醉ひ鳴く春鳥よ
なにを告げくる鶴の聲
それ鳥の音にトひて
よろこびありと祝ふあり
高き聖のこの村に
聲をあげさせたまふらん
世を傾けむ麗人の
茂れる賤の春草に

いでたまふかとのゝしれど
誰かしるらん新星のまことの北をさしゝめし
さみしき蘆の湖の沈める水に映つるとき
名もなき賤の片びさし春の夜風の音を絶え
村の南のかたほとりその夜生れし牝の馬は
流るゝ水の藍染の青毛やさしき姿なり
北に生れし雄の馬の栗毛にまじる紫は
色あけぼのゝ春霞光をまとふ風情あり

星のひかりもをさまりて
噂に殘る鶴の音や
啼く鶯に花ちれば
鳴呼この村に生れてし
馬のありとや問ふ人もなし

雄馬

あな天雲にともなはれ
綠の髮をうちふるひ
雄馬は人に隨ひて
箱根の嶺を下りけり
胸は踴りて八百潮の
かの蒼溟にゆくごとく
喉はよせくる春濤を

飲めども渇く風情あり
目はひさかたの朝の星
睫毛は草の淺緑
うるほひ光る眼瞳には
千里の外もほがらにて
東に照らし西に入る日の
天つみそらを渡る日の
朝日夕日の行衛さへ
雲の絶間に極むらん
二つの耳をたとふれば
いと幽なる朝風に
そよげる草の葉のごとく
蹄の音をたとふれば
紫金の色のやきがねを
高くも叩く響あり

狂へば長き髪の
うちふりうちふる亂れ髪
燃えてはめぐる血の汐の
流れて躍る春の海
噴く紅の光には
火炎の氣息もあらだちて
深くも遠き嘶聲は
大神の住む梁の
塵を動かす力あり
あゝ朝鳥の音をきゝて
富士の高根の雪に鳴き
夕つげわたる鳥の音に
木曾の御嶽の巖を越え
かの青雲に嘶きて
天より天の電影の

光の末に隱るべき
雄馬の身にてありながら
なさけもあつくなつかしき
主人のあとをとめくれば
箱根も遠し三井寺や
日も暖に花深く
さゝなみ青き湖の
岸の此彼草を行く
天の雄馬のすがたをば
誰かは思ひ誰か知る
しらずや人の天雲に
歩むためしはあるものを
天馬の下りて大土に
歩むためしのなからめや
見よ藤の葉の影深く

岸の若草香にいで
春花に醉ふ蝶の夢
そのかけを履む雄馬には
一つの紅き春花に
見えざる神の宿あり
一つうつろふ野の色に
つきせぬ夫のうれひあり
嗚呼鷲鷹の飛ぶ道に
高く懸れる大空の
無限の絃に觸れて鳴り
男神女神に戲れて
照る日の影の雲に鳴き
空に流るゝ滿潮を
飲みつくすとも渴くべき
天馬よ汝が身を持ちて

鳥のきて啼く鳰の海
花橘の蔭を履む
その姿こそ雄々しけれ

牝馬

青波深きみづうみの
岸のほとりに生れてし
天の牝馬は束なる
かの陸奥の野に住めり
霞に霑ひ風に擦れ
音もわびしき枯くさの
すゝき尾花にまねかれて
荒野に嘆く牝馬かな
誰か燕の聲を聞き

たのしきうたを耳にして
日も暖かに花深き
西の空をば慕はざる
誰か秋鳴くかりがねの
かなしき歌に耳たてゝ
ふるさとさむき遠天の
雲の行衛を慕はざる
白き羚羊に見まほし
透きては深く柔軟き
眼の色のうるほひは
吾が古里を忍べばか
蹄も薄く肩痩せて
四つの脚さへ細りゆき
その鬣の艶なきは
荒野の空に嘆けばか

春は名取の若草や
病める力に石を引き
夏は國分の嶺を越え
牝馬にあまる鹽を負ふ
秋は廣瀬の川添の
紅葉の蔭にむちうたれ
冬は野末に日も暮れて
みぞれの道の泥に饑ゆ
鶴よみそらの雲に飽き
朝の霞の香に醉ひて
春の光の空を飛ぶ
羽翼の色の嫉きかな
獅子よさみしき野に隱れ
道なき森に驚きて
あけぼの露にふみ迷ふ

鋭き爪のこひしやな
鹿よ秋山妻戀に
黄葉のかげを踏みわけて
谷間の水に喘ぎよる
眼晴の色のやさしやな
人をつめたくあぢきなく
思ひとりしは幾歳か
命を薄くあさましく
思ひ初めしは身を責むる
強き軛に嘆き佗び
花に涙をそゝぐより
悲しいかなや春の野に
湧ける泉を飲み干すも
天の牝馬のかぎりなき
渴ける口をなにかせむ

悲しいかなや行く水の
岸の柳の樹の蔭の
かの新草の多くとも
餓ゑたる喉をいかにせむ
身は塵埃の八重葎
しげれる宿にうまるれど
かなしや地の青草は
そのあ慰藉にあらじかし
あゝ天雲や天雲や
塵の世にこれやこの
是世にこれも捨てよ
轡も折れよ世も捨てよ
狂ひもいでよ軛さへ
嚙み砕けとぞ祈るなる
牝馬のこゝろ哀なり
盡きせぬ草のありといふ

天つみそらの慕はしや
渇かぬ水の湧くといふ
天の泉のなつかしや
せまき厩を捨てはてゝ
空を行くべき馬の身の
心ばかりはやれども
病みては零つる泪のみ
草に生れて草に泣く
姿やさしき天の馬
うき世のものにことならで
消ゆる命のもろきかな
散りてはかなき柳葉の
そのすがたにも似たりけり
波に消え行く淡雪の
そのすがたにも似たりけり

げに世の常の馬ならば
かくばかりなる悲嘆に
身の苦悶を恨み佗び
聲ふりあげて嘶かん
亂れて長き鬣の
この世かの世の別れにも
心ばかりは靜和なる
深く悲しき聲きけば
あゝ幽遠なる氣息に
天のうれひを紫の
野末の花に吹き殘す
世の名殘こそはかなけれ

雞

花によりそふ鷄の
夫よ妻鳥よ燕子花
いづれあやめとわきがたく
さも似つかしき風情あり

姿やさしき牝鷄の
かたちを耻づるこゝろして
花に隱るゝありさまに
品かはりたる夫鳥や

雄々しくたけき雄鷄の

とさかの色も艶にして
黄なる口嘴脚蹴爪
尾はしだり尾のながくし

問ふても見ましし誰がために
よそほひありく夫鳥よ
妻守るためのかざりにと
いひたげなるぞいぢらしき

畫にこそかけれ花鳥の
それにも通ふ一つがひ
霜に佗寢の朝ぼらけ
雨に入日の夕まぐれ

空に一つの明星の

闇行く水に動くとき
日を迎へんと鶏の
夜の使を音にぞ鳴く

露けき朝の明けて行く
空のながめを誰か知る
燃ゆるがごとき紅の
雲のゆくへを誰か知る

闇もこれより隣なる
聲ふりあげて鳴くときは
人の長眠のみなめざめ
夜は日に逼ふ夢まくら

明けはなれたり夜はすでに

いざ妻鳥と巣を出でゝ
餌をあさらんと野に行けば
あなあやにくのものを見き

見しらぬ鶏の音も高に
あしたの空に鳴き渡り
草かき分けて來るはなぞ
妻戀ふらしや妻鳥を

ねたしや露に羽ぬれて
朝日にうつる影見れば
雄鶏に惜しき白妙の
雪をあざむくばかりなり

かあらしら聲たけき

敵のさまを懼れてか
聲色あるさまに羞ぢてかや
妻鳥は花に隱れけり

かくと見るより堪へかねて
背をや高めし夫鳥は
羽がきも荒く飛び走り
蹴爪に土をかき狂ふ

筆毛のさきも逆立ちて
血潮にまじる眼のひかり
二つの鶏のすがたこそ
是おそろしき風情なれ

妻鳥は花を馳け出でゝ

爭鬪分くるひまもなみ
たがひに蹴合ふ蹴爪には
火焔もちるとうたがはる

蹴るや左眼の的それて
羽に血しほの夫鳥は
敵の右眼をめざしつゝ
爪も折れよと蹴返しぬ

蹴られて落つるくれなゐの
血汐の花も地に染みて
二つの鶏の目もくるひ
たがひにひるむ風情なし

そこに聲あり涙あり

爭ひ狂ふ四つの羽
血潮に滑りし夫鳥の
あな仆れけん聲高し

一聲長く悲鳴して
あとに仆るゝ夫鳥の
羽は血汐の朱に染み
あたりにさける花紅し

あゝあゝ熱き涙かな
あるに甲斐なき妻鳥は
せめて一聲鳴けかしと
屍に嘆くさまあはれ

なにとは知らぬかなしみの

いつか恐怖と變りきて
思ひ亂れて音をのみぞ
鳴くや妻鳥の心なく

我を戀ふらし音にたてゝ
姿も色もなつかしき
花のかたちと思ひきや
かなしき敵とならんとは

花にもつるゝ蝶あるを
鳥に緣のなからめや
おそろしきかな其の心
なつかしきかな其の情

紅に染みたる草見れば

鳥の命のもろきかな
火よりも燃ゆる戀見れば
敵のこゝろのうれしやな

見よ動きゆく大空の
照る日も雲に薄らぎて
花に色なく風吹けば
野はさびしくも變りけり

かなしこひしの夫鳥の
冷えまさりゆく其姿
たよりと思ふ一ふしの
いづれ妻鳥の身の末ぞ

恐怖を抱く母と子が

よりそふごとくかの敵に
なにとはなしに身をよする
妻鳥のこゝろあはれなれ

あないたましのながめかな
さきの樂しき花ちりて
空色暗く一彩毛の
雲にかなしき野のけしき

行きてかへらぬ鳥はいざ
夫か妻鳥か燕子花
いづれあやめを踏み分けて
野末を歸る二羽の鶏

松島瑞巌寺に遊び葡萄栗鼠の木彫を觀て

舟路も遠し瑞巌寺
冬逍遙のこゝろなく
古き扉に身をよせて
飛彈の名匠の浮彫の
葡萄のかげにきて見れば
菩提の寺の冬の日に
刀悲しみ鑿愁ふ

ほられて薄き葡萄葉の
影にかくるゝ栗鼠よ
姿ばかりは隱すとも
かくすよしなし鑿の香は

うしほにひゞく磯寺の
かねにこの日の暮るゝとも
夕闇かけてたゝずめば
こひしきやなぞ甚五郎

夏草

一——春やいづこに

春やいづこに

かすみのかげにもえいでし
糸の柳にくらぶれば
いまは小暗き木下闇
あゝ一時の　春やいづこに

色をほこりしあさみどり
わかきむかしもありけるを
今はしげれる夏の草
あゝ一時の　春やいづこに

梅も櫻もかはりはて
枝は綠の酒のごと
醉ふてくづるゝ夏の夢
あゝ一時の　春やいづこに

鷲の歌

みるめの草は青くして海の潮の香にゝほひ
流れ藻の葉はむすぼれて蜑の小舟にこがるゝも
あしたゆふべのさだめなき大龍神の見る夢の
闇きあらしに驚けば海原とくもかはりつゝ

とくたちかへれ夏波に友よびかはす濱千鳥
もしほやく火はきえはてゝ岩にひそめるかもめどり
蜑は笘やに舟は磯いそうちよする波ぎはの
削りて高き巖角にしばし身をよす二羽の鷲

いかづちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆるまも
寝みだれ髪か黒雲の風にふかれつそらに飛び
葡萄の酒の濃紫いろこそ似たれ荒波の
波のみだれて狂ひよるひゞきの高くすさまじや

翼の骨をそばだてゝすがたをつゝむ若鷲の
身は覆羽やさごろもや腋羽のうちにかくせども
見よ老鷲はそこ白く赤すぢたてる大爪に
岩をつかみて中高き頭靜かになかめけり

ゆに白髪のものゝふの劍の霜を拂ふごと
唐藍の花ますらをのかの青雲を慕ふごと
黄葉の影に啼く鹿の谷間の水に喘ぐごと
眼鋭く老鷲は雲の行くへをのぞむかな

わが若鷲はうちひそみわが老鷲はたちあがり

小河に映る明星の澄めるに似たる眼して
黒雲の行く大空のかなたにむかひうめきしが
いづれこゝろのおくれたり高し烈しとさだむべき

わが若鷲は琴柱尾や胸に文なす鷸の斑の
承毛は白く柔和に谷の落し羽飛ぶときも
湧きて流るゝ眞清水の水に翼をうちひたし
このめる蔭は行く春のなごりにさける花躑躅

わが老鷲は肩剛く胸腹廣く溢れいで
烈しき風をうち凌ぐ羽は著くもあらはれて
藤の花かも胸の斑や鼻に甲をおくごとく
鳥の命の戰ひに翼にかゝる老の霜

けにいかめしきものゝふの盾にもいづれ翼をば

張りひろげたる老鷲のふたゝびみたび羽ばたきて
躍れる胸は海潮の湧きつ流れつ鳴るごとく
力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな

黒岩芽の岩ばなに生ふにも似るか若鷲の
巖角ふかく身をよせて飛ぶ老鷲をうかゞふに
紋は花菱舞ひ扇ひらめきかへる疾風の
わが老鷲を吹くさまは一葉を振るに似たりけり

たゝかふためにうまれては羽を劍の老鷲の
うたんかたんと小休なき熱き胸より吹く氣息は
色くれなゐの火炎かもげに悲痛の湧き上り
勁き翼をひるがへしかの天雲を凌ぎけり

光を慕ふ身なれども運命かなしや老鳥の

一こゑ深き苦悶のおとをみそらに残しおき
金絲の縫の黒繻子の帶かとぞ見る黒雲の
羽袖のうちにつゝまれて姿はいつか消えにけり

あゝさだめなき大空のけしきのとくもかはりゆき
闇きあらしのをさまりて光にかへる海原や
細くかゝれる彩雲はゆかりの色の濃紫
薄紫のうつろひに樂しき園となりけらし

命を岩につなぎては細くも絲をかけとめて
腋羽につゝむ頭をばうちもたげたる若鷲の
鈎にも似たる爪先の雨にぬれたる岩ばなに
かたくつきたる一つ羽はそれも名殘か老鷲の

霜ふりかゝる老鷲の一羽をくはへ眺むれば

夏の光にてらされて岩根にひゞく高潮の
碎けて深き海原の岩角に立つ若鷲は
日影にうつる雲さして行くへもしれず飛ぶやかなたへ

銀河

天の河原を
ながむれば
星の力は
おとろへて
遠きむかしの
ゆめのあと
こゝにちとせを
すぎにけり
そらの泉の
よのひとの

汲むにまかせて
わきいでし
天の河原は
かれはてゝ
水はいづこに
うせつらむ

ひゞきをあげよ
織姫よ
みどりの空は
かはらねど
ほしのやどりの
今ははた
いづこに梭の
音をきかむ

あゝひこぼしも
織姫も
今はむなしく
老い朽ちて
夏のゆふべを
かたるべき
みそらに若き
星もなし

白磁花瓶賦

みしやみぎはの白あやめ
はなよりしろき花瓶を
いかなるひとのたくみより
うまれいでしとしるやきみ
瓶のすがたのやさしきは
根ざしも清き泉より
にほひいでたるしろたへの
こゝろのはなと君やみん
さばかり清きたくみぞと

いひたまふこそうれしけれ
うらみわびつるわが友の
うきなみだよりいでこしを

ゆめにたはふれ夢に醉ひ
さむるときなきわが友の
名殘は白き花瓶に
あつきなみだの殘るかな

にごりをいでゝさくはなに
にほひありとなあやしみそ
光は高き花瓶に
戀の嫉妬もあるものを

命運をよそにかけろふの

きゆるためしぞなしといへ
あまりに薄き緣こそ
友のこのよのいのちなれ

やがてさかえんゆくすゑの
ひかりも待たで夏の夜の
短かき夢は燭火の
花と散りゆくはかなさや

つゆもまだひぬみどりばの
しげきこずゑのしたかげに
ほとゝぎすなく夏のひの
もろ葉がくれの青梅も

夏の光のかゞやきて

さつきの雨のはれわたり
黄金いろづく梅が枝に
たのしきときやあるべきを

胸の青葉のうらわかみ
朝露しげきこずゑより
落ちてくやしき青梅の
實のひとつなる花瓶よ

いのちは薄き蟬の羽の
ひとへごろものうらもなく
はじめて友の戀歌を
花影にきてうたふとき

緑のいろの夏草の

あしたの露にぬるゝごと
深くすゞしきまなこには
戀の雫のうるほひき

影を映してさく花の
流るゝ水を慕ふごと
なさけをふくむ口唇に
からくれなゐの色を見き

をとめごゝろを眞珠の
藏とは友の見てしかど
寶の胸をひらくべき
戀の鍵だになかりしか

いとけなきかなひとのよに

智恵ありがほの戀なれど
をとめごゝろのはかなさは
友の得しらぬ外なりき

あひみてのちはとこしへの
わかれとなりし世のなごり
かなしきゆめと思ひしを
われや忘れじ夏の夜半

月はいでけり夏の夜の
青葉の蔭にさし添ひて
あふげば胸に忍び入る
ひかりのいろのさやけさや

ゆめにゆめ見るこゝちして

ふたりの膝をうち照らす
月の光にさそはれつ
しづかに友のうたふうた

たれにかたらむ
わがこゝろ
たれにかつげむ
このおもひ

わかきいのちの
あさぼらけ
こゝろのはるの
たのしみよ

などいたましき

かなしみの
ゆめとはかはり
はてつらむ

こひはにほへる
むらさきの
さきてちりぬる
はななるを

あゝかひなしや
そのはなの
ゆかしかるべき
かをかげは

わがくれなゐの

かほばせに
とゞめもあへぬ
なみだかな

くさふみわくる
こひつじよ
なれものずゑに
まよふみか

さまよひやすき
たびゞとよ
なあやまりそ
ゆくみちを

龍を刻みし宮柱

ふとき心はありながら
薄き命のはたとせの
名残は白き瓶ひとつ

たをらるべきをいのちにて
はなさくとにはあらねども
朝露おもきひとえだに
うれひをふくむ花瓶や

あゝあゝ清き白雪は
つもりもあへず消ゆるごと
なつかしかりし友の身は
われをのこしてうせにけり

せめては白き花瓶よ

消えにしあとの野の花の
色にもいでよわが友の
いのちの春の雪の名残を

きりぐす

去年(こぞ)蔦の葉の
かけにきて
うたひいでしに
くらぶれば
ことしも同じ
しらべもて
かはるふしなき
きりぐす

耳なきわれを
とがめそよ

うれしきものと
おもひしを
自然(しぜん)のうたの
かくまでに
舊(ふる)きしらべと
なりけるか

同じしらべに
たへかねて
草と草との
花を分け
聲あるかたに
たちよりて
蟲のこたへを
もとめけり

花をへだてゝ
きみがため
聞くにまかせて
うたへども
うたのこゝろの
かよはねば
せなかあはせの
きりぐすのはるもの

二—新潮

新潮

一

我あけまきのむかしより
潮の音を聞き慣れて
磯邊に遊ぶあさゆふべ
海人の舟路を慕ひしが
やがて空しき其夢は
身の生業となりにけり

七月夏の海の香の
海藻に匂ふ夕まぐれ
兄もろともに舟浮けて

力をふるふ水馴棹
いづれ舟出はいさましく
波間に響く櫂の歌

夕潮青き海原に
すなどりすべく漕ぎくれば
卷きては開く波の上の
鷗の夢も冷やかに
浮び流るゝ海草の
目にも幽かに見ゆるかな

まなこをあげて落つる日の
きらめくかたを眺むるに
羽袖うちふる鳩隼は
彩なす雲を舞ひ出でゝ

翅の塵を拂ひつゝ
物にかゝはる風情なし

飄々として鳥を吹く
風の力もなにかせむ
勢龍の行くごとく
羽音を聞けば葛城の
そつ彦むかし引きならす
眞弓の絃の響あり

希望すぐれし鵠隼よ
せめて舟路のしるべせよ
げにその高き荒魂は
敵に赴く白馬の
白き鬣うちふるひ

風を破るにまさるかな

海面見ればかげ動く
深紫の雲の色
はや暮れて行く天際に
行くへや遠き鎗峯の
もろ羽は彩にうつろひて
黄金の波にたゞよひぬ

朝夕を刻みてし
天の柱の影暗く
雲の帳もひとたびは
輝きかへる高御座
西に傾く夏の日は
遠く光彩を沈めけり

見ようるはしの夜の空の
見ようるはしの空の
北斗の清き影冱えて
望みをさそふ天の花
とわの宿りも舟人の
光を仰ぐためしかな

潮を照らす篝火の
きらめくかたを窺へば
松の火あかく燃ゆれども
魚行くかげは見えわかず
流れは急しふなべりに
觸れてかつ鳴る夜の浪

二

またゝくひまに風吹きて
舞ひ起つ雲をたとふれば
戰に臨むまずらをの
あるは鉦うち貝を吹き
あるは太刀佩き劍執り
弓矢を持つに似たりけり

光は離れ星隱れ
みそらの花はちりうせぬ
彩美しき卷物を
高く舒べたる大空は

みるまに暗く覆はれて
目にすさまじく變りけり

聞けばはるかに萬軍の
鯨波のひゞきにうちまぜて
陣螺の音色ほがらかに
野の空高く吹けるごと
闇きの潮の音のうち
いと新しき聲すなり

我あまたゝび海にきて
風吹き起るをり〳〵の
波の響に慣れしかど
奇しき清き音をたてゝ
魔の吹く角かとぞ

うたがはるゝは聞かざりき
こゝろせよかしはらからよ
な恐れそと叫ぶうち
あるはけはしき青山を
凌ぐにまがふ波の上
あるは千尋の谷深く
落つるにまがふ濤の影

戰ひ進むもゝふの
劍の霜を拂ふごと
溢るゝばかり奮ひ立ち
潮を擊ちて艪ぎくれば
梁はふたりの盾にして
佗は鋭き刃なり

たとへば波の西風の
梢をふるひふるごとく
舟は枯れゆく秋の葉の
枝に離れて散るごとし
帆檣なかば折れ砕け
篷は海に漂ひぬ

哀しや狂ふ大波の
舟うごかすと見るうちに
櫓をうしなひしはらからは
けに消えやすき白露の
落ちてはかなくなれるごと
海の藻屑とかはりけり

あゝ思のみはやれども
眼の前のおどろきは
剣となりて胸を刺し
千々に力を砕くとも
怒りて高き逆波は
猛き心を傷ましむ

命運よなにの戯れぞ
人の命は春の夜の
夢とやげにも夢ならば
いとゞ悲しき夢をしも
見るにやあらむ海にきて
まのあたりなるこの夢は
これを思へば胸満ちて

流るゝ涙せきあへず
今はた櫂をうちふりて
波と戰ふ力なく
死して仆るゝ人のごと
身を舟板に投げ伏しぬ

一葉にまかふ舟の中
波にまかせて流れつゝ
聲を放ちて泣き入れば
げに底ひなきわだつみの
上に行衛も定めなき
鷗の身こそ悲しけれ

時には遠き常闇の
光なき世に流れ落ち

朽ちて行くかと疑はれ
時には頼む人もなき
冷たさ冥府の水底に
沈むかとこそ思はるれ

あゝあやまちぬよしや身は
おろかなりともかくてわれ
もろく果つべき命かは
照る日や月や上にあり
大龍神も心あらば
賤しきわれをみそなはせ

かくと心に定めては
波もものかはと勵みたち
闇のかなたを窺ふに

空はさびしき雨となり
潮にうつる燐の火の
亂れて燃ゆる影青し

我よるべなき海の上に
活ける力の胸の火を
わづかに頼む心より
消えてはもゆる闇の夜の
その靜かなる光こそ
漂ふ身にはうれしけれ

危うきばかりともすれば
波にゆらるゝこの舟の
行くへを照らせ燐の火よ
海よりいでゝ海を焚く

青きほのほの影の外
道しるべなき今の身ぞ

碎かば碎けいざさらば
波うつ櫂はこゝにあり
たとへ舟路は暗くとも
世に勝つ道は前にあり
あゝ新潮にうち乘りて
命運を追ふて活きて歸らん

野路の梅

風かぐはしく吹く日より
夏の緑のまさるまで
梢のかたに葉がくれて
人にしられぬ梅ひとつ

梢は高し手をのべて
えこそ觸れめやたゞひとり
わがものがほに朝夕を
ながめ暮してすごしてき

やがて鳴く鳥おもしろく

黄金の色にそめなせば
行きかふ人の目に觸れて
落ちて履まるゝ野路の梅

晩春の別離

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはなかるらん
恨は友の別れより
さらに長きはなかるらん

君を送りて花近き
高樓までもきて見れば
緑に迷ふ鶯は
霞空しく鳴きかへり
白き光は佐保姫の
春の車駕を照らすかな

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでゝ
懐へば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき
東膽吹の山高く
西には比叡比良の峯
日は行き通ふ山々の
深きながめをふしあふぎ
いかにすぐれし想をか
沈める波に湛ふらん

流れは空し法皇の
夢杳かなる鴨の水
水にうつろふ山城の

みやびの都行く春の
霞めるすがた見つくして
畿内に迫る伊賀伊勢の
鈴鹿の山の波遠く
海に落つるを望むとき
いかに萬の恨をば
空行く鷲に窮むらん

春去り行かば青によし
奈良の都に尋ね入り
としつき君がこひ慕ふ
御堂のうちに遊ぶとき
古き藝術の花の香の
伽藍の壁に遺りなば
いかに韻を身にしめて

深き思に沈むらん

さては秋津の島が根の
南の翼紀の國を
回りて進む黒潮の
鳴門に落ちて行くところ
天際遠く白き日の
光を泄らす雲裂けて
目にはるかなる遠海の
波の踴るを望むとき
いかに胸うつ音高く
君が血汐のさわぐらん

または名に負ふ歌枕
波に千とせの色映る

明石の浦のあさぼらけ
松萬代の音に響く
舞子の濱のゆふまぐれ
もしそれ海の雲落ちて
淡路の島の影暗く
狹霧のうちに鳴き通ふ
千鳥の聲を聞くときは
いかに浦邊にさすらひて
遠き古を忍ぶらん

けに君がため山々は
雲を停めん浦々は
磯に流るゝ白波を
揚げんとすらんよしさらば
旅路はるかに野邊行かば

野邊のひめごと森行かば
森のひめごとさぐりもて
高きに登り天地の
もなかに遊び大川の
流れを窮め山々の
神をも呼ばひ谷々の
鬼をも起し歌人の
魂をも遠く返しつゝ
清しき聲をうちあげて
朽ちせぬ琴をかき鳴らせ

あゝ歌神の吹く氣息は
絶えてさびしくなりにけり
ひゞき空しき天籟は
いづくにかある

九つの
づまり
とつくにの
垣も
はりけり
スの
ともいにしへの
づくぞや
水青く
すともしへの
けり

藝術の神の
かんさびませしんづ
阿典の宮殿の玉垣
今はうつろひかはりけり
草の緑はグリイスの
牧場を今も覆ふとも
みやびつくせしいにしへの
笛のしらべはいづくぞや
かのバピロンの水青く
千歳の色をうつすとも
柳に懸けしへの
琴は空しく流れけり

けにや大雅をこひ慕ふ
君にしあれば君がため
藝術の空に懸る日も
時を導く星影も
いづれ行くへを照らしつゝ
深き光を示すらん

さらば名残はつきずとも
袂を別つ夕まぐれ
見よ影深き欄干に
煙をふくむ藤の花
北行く鴈は大空の
霞に沈み鳴き歸り
彩なす雲も愁ひつゝ
君を送るに似たりけり

あゝいつかまた相逢ふて
もとの契りをあたゝめむ
梅も櫻も散りはてゝ
すでに柳はふかみどり
人はあかねど行く春を
いつまでこゝにとゞむべき
われに惜むな家づとの
一枝の筆の花の色香を

月光

さなり巖を擊つ波の
夕の夢を洗ふとも
綠の岸に枕して
松眠りなばいかにせむ

あふげば胸に忍び入る
清き光に照らされて
われのみひとり笛吹けど
君踊らずばいかにせむ

こよひ月かげ新しき

衣を君にもたらすも
としつき慣れてふりたるを
君し捨てずばいかにせむ

雲は緑の波を揚げ
高き潮を分つとも
君し涙の涸れはて
胸うごかずばいかにせむ

われあやまれり其殻の
安きを思へかたつむり
君し眠りの楽しくば
さめずもあれや月の光に

一

さなきだに露したゝるゝ
深き樹蔭にたゝずめば
老いずの夢にたとふべき
夜の思に醉ふものを
月の光のさし入りて
林のさまぞ靜かなる
緑を洗ふ白雨の
すぎにしあとの梢には
清みたる酒の香に通ふ
雫流れてにほふらん

木下に夢を見よとてか
林の夜の靜けさは
暗きに沈む樹々の葉の
影の深きによればなり
おぼつかなくも樹の蔭の
闇の深きに沈めるは
緑に煙る夜の月の
深き木枝をもれいでゝ
光もいとゞ花やかに
さし入る影のあればなり

耳をたつればなつかしや
かなたこなたに木がくれて
鳴く音をもらす子規

はるかに聞けばたえ〳〵に
流れてひゞく谷の水
けにやいみじき其聲は
いとしめやかにつま琴の
板戸をもるゝ忍び音の
糸のしらべに通ふらん
ひゞきをあげよ谷間に
むせびて下る河水や
ひゞきをあげよ月影に
しらべをつくる河水や
よしや林の深くして
眼には流れの見えずとも
月の光にさそはれて
夜の思を送れその琴

二

都の塵はかゝるとも
市の響はかよふとも
さながら月に照らされて
鏡にまがふ池のおも
さゞれ波立ち池水の
動けるかたをながむれば
鏡の中に水鳥の
むらがり遊ぶ影の見ゆ
人の世はけにとゞまらで

特につけつゝ動くとも
藝術の國の靜けさは
この池の面に似たるかな
かしこに浮ぶ水鳥は
沈むともなきたが影ぞ
かしこに動くさゞ波は
たが浴みするわざならん
あゝ照る月はむかしより
人の望むにまかせたり
藝術の花はむかしより
人の慕ふにまかせたり
ともしび乘りてよもすがら

遊ぶといふもことわりや
藝術は長し月清し
この命こそ短かけれ

いのちはよしや指をりて
をしからぬまで數ふとも
望は遠く夢熱き
そのほのほこそ短かけれ

誰かは早く老いざらむ
誰かは早く朽ちざらむ
心の花のうつろひは
一夜眠りのうちにあり

これを思へば堪へがたく

みぎはにくだり池水に
ひゞくを聽けば音遠く
靜かに沈む鐘の聲

三

月光の曲銀の笛
はるけき西の國ぶりの
君吹きすさぶ一ふしは
絲の雲を停めけり

つきは梢を離れいで
影花やかにさすものを
今一度はせめて君

吹けやしらべを同じ音に
たとへばすめる眞清水の
岩にあふれて鳴るごとく
深きまことの泉より
その笛の音や流るらむ

いづれも末は花すぎて
まことの色はあせなむを
君はいかなるたくみもて
かく新しき聲を吹く

むかしの箏の譜は舊りて
いくもゝとせを過ぎにけり
藝術の花は草と化け

梁の塵山と成る

薄暮橋のたもとにて
故の人に逢ふごとく
されば一ふし新しき
君がしらべぞなつかしき

うれしや高き音をそへて
清き男の吹く笛に
みどりにけぶる月影の
いやうるはしく見ゆるかな

四

ゆふべとなりぬ夏の日の
長きつとめをうちすてゝ
いざや雄々しきかいなより
流るゝ汗をねぐへかし

洗へ綠の樹のかげの
したゝる露のすゞしさに
君がくるしきあらがねの
土もとけなむ晝の夢

蟲音も高く群を呼ぶ
琴のしらべにさも似たり
風おのづから吹きにほふ
たが招くともなかりけり

燃ゆるほのほのくれなるの
塵も靜かにをさまりて
樂しき園にかはりゆく
夕暮さまのおもしろや

君やも行くかわれはしも
浮べる雲にたへかねて
光を浴びむ白銀の
花やかにさす月の光を

五

あゝ時として月見れば
空しき天の戸を渡る

すめる鏡と見えにけり
あるときはまた世に近く
いざよひ渡る横雲に
いと慣れ易く見えにけり

また時としてながむれば
いとゞ常なき世を超えて
朽ちず盡きせず見えにけり
あるときはまた影清く
まどかに高くかゝれども
とく缺け易く見えにけり

また時としてながむれば
光の絲に夜と朝を
つなぎとゞむと見えにけり

あるときはまた冷やかに
花と草との分ちなく
世を照らすかと見えにけり

また時としてながむれば
昔も今もさまよひて
行くへもしらず見えにけり
あるときはまたさだめなき
浮べる雲に枕して
ねむり靜かに見えにけり

曉の誕生

東の空のほの〳〵と
汝が世は白みそめにけり
この曉のさまを見て
運命をいかに占なはむ

ことにさやけき紅の
光を放つ明星や
やがて處女となるまでの
汝がおひさきのしるべせよ

朝風舞をまふごとく

はるかに雲の袖を吹き
鷄は寢覺に驚きて
先づ黎明を呼びにけり

はじめて朝の床の上へ
汝が初聲をきくときは
蕾を破るあけぼの〻
蓮の花にまがふかな

ぬるき潮に浴みして
朝日に匂ふ茜染
まだ罪もなきすがたこそ
なかばは夢の風情なれ

いかにいかなる世なりとは

思ふこゝろもなからまし
そのうるはしも眼もて
なにをか見んと願ふらむ

まだ生れ來し世の中に
願ふもとめもなからまし
空にやさしき手をのべて
なにをか早やも慕ふらむ

行く末花と生ひ立ちて
いかなる夢を重ぬとも
かゝるゆたけき朝のごと
心の空の靜かなれ

あゝ朽ちずてふ九つの

藝術の神も心あらば
このうるはしきみどりごに
香の露をそゝげかし

やがて好みて琴彈かば
指を葡萄の蔓となし
耳をそよげる葦となし
たなれの糸に觸れしめよ

やがて好みて筆持たば
心を文の梭となし
胸を流るゝ雅となし
色あたらしく織らしめよ

よし琴彈かず歌よまず

畫をかくわざにすぐれずも
せめて藝術を戀ひ慕ふ
深き情を持たしめよ

盃あげて美き酒を
こゝろごゝろにくみかはし
歌をつくりてよろこびの
この曉をうたひうたはん

終焉の夕

潮は落ちて歸りけり
生命の岸をうつ波の
やがて夕に回れるを
ひきとゞむべきすべもなし

行くにまかせよ幾卷の
聖のふみはありとても
耆婆のたくみも海山の
藥も今は力なし

八月螢飛び亂れ

終りの床に迷ひきて
まだうらわかきたをやめの
香の魂をさそひけり

みそらの高き戸を出でゝ
彩なす雲のくだるとき
鐘の響も沈まりて
眠るがごとく息絶えぬ

麗はしかりし黒髪を
吹く風いとゞ冷やかに
枕を照らす夕暮の
星も思を傷ましむ

抱きこがるゝひとゝの

涙は床をひたすとも
かをり空しく花折れて
運命の前に仆れけり

めぐみはあつき父母に
さきだつことのかなしさを
かこちわびてし口唇も
今は艶なく力なし

慕ひあへりしはらからに
永き別れを告げんとて
深き情にかゞやきし
心の窓も閉ぢはてぬ

病める枕邊近くきて

夕の鳥の鳴く聲に
涙ながらも微笑みし
色さへ今はいづくぞや

光も見えずなりぬれば
みまもる人を抱きしめ
名を尋ねつゝ手をとりし
腕は石となりにけり

落つる日を見よひとたびは
かゞやきかへり沈むごと
やがて光をまとひしは
つひに消えゆく時なりき

あゝ死の海の底深く

聲も言葉も通はねば
なげきあまりしひとくの
涙は潮と流るらん

終りの床の遺骸は
ありし名残を見すれども
はやその魂はとこしへの
波に隱るゝかもめどり

うぐゐす

さはれ空しきさへずりは
雀の群にまかせてよ
うたふをきくや鶯の
すぎにしかたの思ひでを

はじめて谷を出でしとき
朔風寒く霰ふり
うちに望みはあふれど
行くへは雲に隱れてき

露は綠の羽を閉ぢ

霜は翅の花となる
あしたに野邊の雪を嚙み
ゆふべに谷の水を飲む

さむさに爪も凍りはて
絶えなんとするたびごとに
また新たなる世にいでゝ
くしきいのちに歸りけり

あゝ枯菊に枕して
冬のなげきをしらざれば
誰が身にとめむ吹く風に
にほひ亂るゝ梅が香を

谷間の笹の葉を分けて

凍れる露を飲まざれば
誰が身にしめむ白雪の
下に萠え立つ若草を

げに春の日ののどけさは
暗くて過ぎし冬の日を
思ひ忍べる時にこそ
いや樂しくもあるべけれ

梅のこぞめの花笠を
かざしつ醉ひつゝうたひつゝ
さらば春風吹き來る
香の國に飛びて遊ばむ

かりがね

さもあらばあれうぐひすの
たくみの奥はつくさねど
または深山のこまどりの
しらべのほどはうたはねど
まづかぎりなき一聲に
涙をさそふ秋の雁

長きなげきは泄らすとも
なほあまりあるかなしみを
うつすよしなき汝が身か
などかく秋を呼ぶ聲の

荒き響をもたらして
人の心を亂すらむ

あゝ秋の日のさみしさは
小鹿のしれるかぎりかは
淸しき風に驚きて
羽袖もいとゞ冷やかに
百千の馬の群を出で
浮べる雲は慣るゝかな

菊より落つる花びらは
汝がついばむにまかせたり
時雨に染むるもみぢ葉は
汝がかざすにまかせたり
聲を放ちて叫ぶとも

たれかいましをとゞむべき

星はあしたに冷やかに
露はゆふべにいと白し
風に隨ふ桐の葉の
枝に別れて散るごとく
天の海にうらぶれて
たちかへり鳴け秋のかりが

わすれ草をよみて

わすれぐさは島田氏のむすめ愛子が遺しおける歌文あまたありけるを、そが敎へ親なる人の舟さしよせてしるしありやとつみあつめたるひとまきなり。序のうたは萬里小路伯、小傳は東久世伯、追悼のうたを添えたるは竹柏園のうしなり。なほ卷の終にはともがきの手向草あまた載せたるが、いづれも深く追慕の心を寄せたり。卷のはじめなる俤は、かみのつかねざまもいとつゝましく、前髪のみは西ぶりにしてうるはしく切りさげたる、まだうひ〳〵しき片あげのにつかひたるなど、いづれ昔しのぶの種ならぬは

なし。家は神奈川なる川崎町にありといふ。二十六年の秋よりみやこに出でゝ學ぶのかたわら、竹柏園のあるじにつきて歌文の道ををさめ、すぐれたるほまれありしを四とせめの春病にかゝり、年僅に十七にてみまかりぬ。そのむかしをりをりの記行のふみなど吾許にもてきて朱を加へよなどいひしことも思ひいでられ、さばかりのゑにしもありければ、この卷ひもときて懷舊の情に堪へず、雜の歌の終に、

病あつしかりける時とはし書して、
父母の深きめぐみをよそにして
草葉のつゆときえむとすらむ

とありしを讀み、すなはち其歌にちなみて筆を起し、哀歌をつゞる。

もとより消ゆる露なれば
たれかことばをつくすとも
ちらぬすがたに立ちかへり
もとの草葉にのぼるべき

ふたたせの夏はやもきぬ
のこれる人の惜みてはし
あまる涙をそゝぎてし
おくつきの花さくらんか

絲の草の生ひいでゝ
うるはしき實をたまにぬき
なれがはかばをかざるとも
しづこゝろなく眠るらむ

あしたゆかしくさきいでゝ
ゆふべにちるを數ふるに
拾ふもつきじ言の葉の
にほひをのこすわすれ草

すぐれしゆゑにうつし世に
とゞめもあへず紅(くれなゐ)の
うつろひ易き色にいで
なれはや早くうせにけむ

あしたゆふべの行く雲の
はたてに物を思ふ汝(なれ)
こゝろづくしの冥府(よみ)にまた
むね驚かす夢ありや

春はたのしきうぐひすの
ながおくつきに歌ふとも
よみぢはいかに木蘭の
花より墜つる露ありや

秋はさびしき黄葉の
ながおくつきにかゝるとも
うれひをいかに目にあてゝ
おしぬぐふべき菊ありや

あゝ青塚の青草も
いくその人かあはれまむ
むさしあぶみもむらさきも
つひには同じ秋一葉

ゆめなおそれそ風あれて
雲はうき世にやわぐとも
ゆめなおそれそいなづまの
ながおくつきを照らすとも

なれよ安かれくちなしの
色の泉の岸にさく
よみぢの花に枕して
草葉の影に寢よかし

高山に登りて遠く望むの歌

高根に登りまなじりをきはめて望み眺むれば
わがゆくさきの山河は
目にもほがらに見ゆるかな
みそらを凌ぐ雲の峰
砕けて遠く青に入る

こゝしくくしき磐が根の
連なり亘る山脈は
海にきほへる高潮の
驚き亂れ湧くごとく

大山ずみも動ぎいで
わが精魂を奪ふかな

誰かは譏り誰が恨む
翅をのべし蒼隼は
虚しき天の戸を衝きて
高きみそらにかけれども
うちふりうちふる羽袖だに
引きとゞむべき雲もなし

遠く綠におほはれて
望をつゝむ野のかたに
東に下る河波の
行くへを見れば紫の
山の麓をうちひたし

滔々として流れ去る

あゝ大空に風吹けば
雲おのづから舞ふごとく
迷ひの霧にこめられし
暗き谷間を歩みいで
高根にあれば時を得て
はるかに揚るわが心

かへりみすれば越えてこし
山はうしろに落ち入りて
荒れにし森の影もなく
さみしき野邊も見えわかず
日の照らすとも七重八重
わが故郷は雲に隠れて

二つの泉

自然の母の乳房より
そこに流るゝ泉あり

たとへば花の處女の
やがて優しき母となり
その嬰兒の紅唇を
うるほすさまに似たるかな

一つは清みて冷やかに
谷の間にほとばしり
葉を重ねたる青草の

しげみのうちを流れけり

一つは泉あたゝかに
其色暗く濁りいで
ひゞきは神の鳴るごとく
巌の蔭に溢れけり

幸はあづさにつかれはて
渇きかなしむ人にあれ
あゝ樹の蔭の草深く
すめる泉を飲みほして
自然のうちに湧きいづる
清き生命を汲ましめよ

幸は望みの薄くして

思ひなやめる人にあれ
あゝ夕風のきたるとき
熱き泉に浴みして
自然のうちにほどばしる
奇しき力を知らしめよ

岩と岩との谷のかげ
砂と砂との山のはを
緑の草の生ひいでゝ
花さく園となすまでは
あふれいでつゝ晝も夜も
たえぬ泉としるや旅人

天の河

一　七月六日の夕

あすは思へばひとゝせに
一夜の秋の夕なり
うき世にしげるこひ草を
みそらの星もつまむとや
北斗は色をあらためて
よろづの光なまめきぬ
あふげば清し白銀の
夕波高き天の河
深き泉を湧きいでゝ
うき世の外にたちさわぐ
つきせぬ戀の河水は
遠くいづくに溢るらむ

西風星の花を吹き
天の河岸秋立ちぬ
かの彦星の牽く牛は
しけれる草に湍ぎより
ふたつの角をうちふりて
水の流れを慕ふらむ
河邊に彦星の履みて行く
高きほとりの通ひ路は
白萩の花さくらむか
人行きなゝ岸のごと
紫苑の草の滿つらむか

ひとり靜かに尋ねよる
彦星のさまいかならむ
あすの逢瀨を微笑みて
かの琴臺の美酒の
盃に醉ふ人のごと
あゆみ危うく行くらむか

または涙を墨染の
衣の袖につゝむとも
なほ觀經の聲雲る
西の聖の夢のごと
戀には道も捨てはて
袖をかざして行くらむか

または旅寢の夢の上に

夢をかさぬる草まくら
ゐにしの外のゐにしとは
それかよけにも捨てがたく
江口の君をたづねよる
侘人のごと行くらむか

天上の戀しかすがに
ことなるふしはありとても
さもあらばあれ形星の
たなばたづめの梭の音に
望みあふれて慕ひゆく
このゆふべこそ樂しけれ

二七夕

こよひみそらの白波に
楫の音すなりひこぼしの
安河原に舟浮けて
風今しこぐらし
かぐはしく吹き匂ふ
花濃き岸にたづさはり
涙は顔をうるほして
老をし知らぬ夢のごと
かしこにかしこに
人の楫の音きこゆ
すなるを星も見て

こひつくすらんこの夕
水影草のうちなびく
川瀬を見ればひとゝせに
ふたゝび逢はぬこひづまに
今し逢ふらし
まだ色青き草麥の
はたけのうちにたふれふし
燃えては熱き紅唇の
たがひに觸るゝ夢のごと
かしこにかしこに
ふれる袖見ゆ
人のすなるを星も見て
こひつくすらんこの夕

川聲さやけしおりたちて
天より深く湧きいづる
戀の泉をうちむすび　今し飲むらし
乾くまもなき染紙を
落つる涙にけがしては
生命の門をかけいでゝ
戀に朽ちぬる夢のごと
人のすなるを星も見て　かしこにかしこに
こひつくすらんこの夕　渡るひこぼし

婚姻の祝の歌

一　花よめを迎ふるのうた

君待つ宵のともしびは
いとゞ火影も花やかに
鶴なきわたる蓬萊の
千世のみどりを照すかな

祝の酒は香にあふれ
錫の提子をひたしけり
いざや門邊にたちいでゝ
君の來るをむかへなむ

星よこよひはみそらより
人の世近くくだりきて
清める光に花よめの
たのしき道のしるべせよ

風よ歌へよ松が枝に
小琴をかけよひとふしは
いとしめやかに道すがら
よろこびの譜をひけよかし

まなこをそゝげひとゝよ
はやかの群はちかづきぬ
ともなひきたるをとめごの
かゞやきわたるさまを見よ

わがうるはしき花よめは
むらさきにさくあやめなり
そのころもには白だんの
いとすぐれたるかをりあり

髪には谷の白百合の
にほへる油うちそゝぎ
むすべる見れば其帯に
黄金の絲を織りなせり

いざやこよひの歡喜の
花のむしろにいざなひて
秋の紅葉を染めなせし
色すべり着る君を祝はん

二　さかもりのうた

ためしすくなきよろこびの
けふのむしろのめでたさに
身を酒瓶となしはて丶
祝の酒にひたらばや

瓶の中なる天地の
祝の夢に醉ひて〳〵
心は花の香に匂ふ
樂しき春の夜に似たり

比翼の鳥のうちかはす

羽袖もいとゞ新しく
天の契りを目にも見る
連理の枝のおもしろや

わがはなむこは紅の
かほばせいとゞうるはしく
まなこはひかりかゞやきて
あしたの星にまがふめり

わがはなよめは白百合の
白きころもをうちまとひ
その黒髪の露ふかく
黄菊の花をかざしたり

つばさならぶる鴛鴦も

雄鳥の羽はまさるごと
いづれか缺くる世の中に
ためしまれなるふたりかな

たれかめでたき言の葉に
神の力は奪ふとも
契の酒をくみかはす
ふたりのさまを喩ふべき

いかにいかなるたくみもて
畫筆に色は寫すとも
缺くるに慣れし彩をもて
ふたりのさまを畫くべき

言ふにも足らじ貝の葉の

たがひに二つ相合ふて
情の海にたつ波の
そこによせてはかへすとも

縁の神にゆるされて
ふたり身は世に合ふのみか
たがひに慕ふ胸の火は
心の空にもゆるかな

地にあるときは二人こそ
またき契といふべけれ
天にありても二人こそ
またき妹背といふべけれ

天の河原は涸るゝとも

連理の枝は朽つるとも
比翼の鳥は離るとも
二人のなかの絶ゆべしや

これを思へばよろこびの
祝の酒に酔ひくだけ
胸のたのしみつきがたく
このさかもりの歌となる

玉山ながく倒れては
おぼつかなくも手をうちて
高砂の歌おもしろき
このむしろこそめでたけれ

三——農　夫

農夫

凡そ萬物に本末あり、改作耕嫁もまた結要あるべし。農民は朝に霧を拂て出て、夕に星を戴て歸る。遠方野山に居る時は少し休むことあれば疇を枕にするといへども、樂も亦其中にあり。人は體を穩に置て氣を詰ること老病する本敷。依之、山人は體を詰め氣は泰にするといふ。によつて長命し、海人は體を泰にして氣を詰る故に短命すといふ。氣體不二なりといへども心

は又替るにや。總じて下民の苦は眼を開きて上より心つきて見る、則ち苦も亦明かにして、上の樂も亦彌樂みなりといふ。耕桑は晝夜男女雨露にぬれて、農民辛苦すること甚し。耕し織らずんば何を以てか三寶の其一とせん。民は心氣をくだき身を霏めて天の造化にしたがひ力むるものは良農なり。農人は遊樂の慾薄くして唯雜食の腹に滿たんことを願ふものなり。

（耕稼春秋、初卷）

序

利根川のほとりにて

一の聲

見ようるはしく照る月の
緑にけぶる夜のひかり
見よゆるやかに行く水の
流れは深き利根の河
花さきにほふ川岸に
光彩を宿す青草の
茂れるかたの靜けさは
眠のごとく見ゆるかな

二の聲

さても自在を翼とし
光にありて闇を知り
みそらに居りて冥府の世の
聲を聽き知るわれらさへ
かの魔界を立ちいでゝ
かくうるはしき月の夜に
自然の業を眺めつゝ
岸のほとりにさまよへば
飽くとしもなき今宵かな

三の聲

あゝ疑惑と悲哀の
夢ひきむすぶ人の子は
いかにこよひの月を見て
夜の思をかさぬらん

げに人のする業よりも
いや空しきはあらじかし
いかに望みは高くして
この天地を狹しとし
泣きつ笑ひつ怒りつゝ
こゝろ一つにすがるとも
そのなすわざを眺れば
甸ふ蟲にいづれぞや
よしといひ又たあしといひ
むなしきは築くたばこも
かの生滅の岸は波
流るゝ砂にいづれぞや

あしたゆふべの影々は
舞臺を脆せてとゞまらず

來るは虹のごとくにて
歸るは北の散るごとし
過にしあとを窮むれば
いづれか兒戲にあらざらむ
消えゆくあとを眺むれば
また尋ぬべきすべもなし

露霜深き利根川の
岸邊の小田のあさゆふべ
彼鋤鍬を友として
力め耕す身なれども
家のむかしを尋ぬれば
まこと賤しき種ならず
けにわれはしもこよひより
彼の心の中に住み

雄々しき彼を誘ひて
戀さまゝの夢を見せ
時に處女と身を化して
この月影の川岸に
奇しき光を投ぐるごと
あやしき影を彼に投げ
時には夢にあらはれて
安き心を奪ひ裂き
胸に霰をそゝぎては
涙の露を落さしめ
うつゝに隱れ夢に出で
光にひそみ影に見え
もゆる試練の火となりて
若き農夫を試みん

二の聲

きけや一ふしほがらかに
遠く吹きすむしらべこそ
彼がすさびの笛ならめ

一の聲

さなりさやけき月影に
笛のあるじをながむれば
まことや彼は農夫なり

三の聲

よしうるはしき青草の
岸にすわりて彼を待たなん

上のまき

一　田畠の間なる小道にて

父

ゆふべ小暗きともしびの
油はつきて消ゆるまで
人は眠りにさそはれて
楽しき夢に入れる間も
いねられなくにたゞひとり
ひとり枕をかき抱き
鳴しの羽掻しば〳〵も
同じ思ひにかへりつゝ

このもろこしの戰にぞ
汝は行かじと嘆きけむ
そのこゝろねをはかりしが
わが疑念は解けざりき

今こそはかく利根川の
岸邊の草に埋もれて
あしたに星の影を履み
ゆふべに深き露を分け
鋤と鍬とを肩にして
賤しき業はいとなめど
もとほまれあるものゝふの
高き流れを汲める身ぞ
すぐれし馬にむちうちて

風に眞弓をひき鳴らし
胸に溢るゝまゝらをの
ほまれは海の湧くがごと
のぞみは雲の行くがごと
雄々しかりける吾父も
草葉の影の夢にだに
汝が言の葉を泄れきかば
いかにはげしき紅の
血汐の涙流すらむ

けに汝はしも吾家の
高きほまれを捨つるまで
世のことわりもわかぬまで
いくさを恐る心かや

農夫

懼れやはするよしや今
心を奪ふいかづちの
ふるふがごとく大砲の
まなこの前にとゞろくも
われは靜かに鍬とりて
としつき慣れし利根川の
岸邊にいでゝ小田うたむ
または流るゝ彈丸飛びて
耳のほとりをかすめども
たなれの鋤を肩にして
ゆふべの歌をうたひつゝ
いと冷やかに桑の樹の
葉蔭を履みて歸るべし

父

しからば遠き軍旅には
たどかいでしとなげくらむ

農夫

なげかざらめや戰と
なべてを思ふ吾身なり
劍をとるも畠うつも
深き差別はあらざらむ

われ時として畠中に
手に持つ鍬を投げ捨てゝ
たがやしするも畠うつも
土をかへすも草ぎるも
汗も膏もおろかしく

生れいでたるわれひとの
空しき生涯一日より
二日につなぐためかとぞ
思へば身をも忘れつゝ
佇立むこともありしなり

まことのさまを尋ぬれば
戰とてもまた同じ
野末の草に流れゆく
活ける血潮やいかならん
劍の霜に滅びゆく
人の運命やいかならん
誰か火に入る蟲のごと
活ける命をほろぼして
あだし火炎に身を焚くの

おろかのわざをまなぶべき
嗚呼つはものゝ見る夢の
花や一時春行かば
剣も骨も深草の
青きしけみに埋るらん
げに凄まじき戰の
あとにもましてうつし世に
いや悲しきはあらじかし

父　おろかしやそのくりごとは
夢見る人のいふことぞ

農夫　さなりうき世の闘爭は
いづれか夢にあらざらん

父　あゝ汝が耳は聾たれば
いかにすぐれしものゝふの
ほまれの鐘も響なし
汝が眼は盲たれば
いかにまことのたらちをの
言葉の花も色ぞなき
かりそめならぬ世のわざを
嘲り笑ふ言の葉は
さはやかなるに似たれども
罵り狂ふまゝすらをの
身の行末をながむれば
みな落魄と涙のみ

あゝわが胸は苦悶と
恥辱と忿怒に溢れたり
かなしあさまし世の人に
汝が言の葉の泄れもせば
冷たき汗は雨のごと
いかに流れて我を浸さん

一二　まへとおなじ

小道にて

母

かくても長き夏の日を
ひとり思ひに沈みつゝ
緑の蔭に佇立みて
いくその時を經つるぞや

ゆめな恨みそ汝が父の
思ひあまりしくろがねの
拳のあとは紫に
深き傷みをのこすとも

そはあらそひの痕としも
思へばさこそ恨みあれ
傷みはいかに夏の日の
烈しきさまに似たりとも
汝がたらちをの秋霜の
敎のほどを思ひ見よ
まだいとけなき昔より
好めるまゝに書も讀み
ものゝあはれもことわり
あらかたは知る汝が身なり
たれか好みてうめる兒に
禍あれと願ふべき
忍びがたきを忍びつゝ
遠き軍旅に行きかねし

農夫

まことやわれはますらをの
ほまれを知らぬ心より
遠きいくさに出で立つを
なげくものにはあらじかし
あゝ吾胸は寫すべき
言葉も知らぬかなしみを
宿せし日より晝も夜も
深き思に沈みつゝ
迷へる蟲の窓にきて
かなたこなたに飛ぶがごと
天と地とに迷ふ身の
おろかをかこつ外あらじ
このかなしみの乳房より

われさま〴〵の智慧を飲み
にがき世の味物の裏
人のまことも虚偽も
あぢはふ身とはなりしなり
このかなしみはあやしくも
我をいざなひ導きて
氣は世を蓋ふまらすをの
高きほまれも夢と見せ
祭の夜の燈火に
戯るゝ人を影と見せ
暗き舞臺の幻燈に
ものゝかたちの映るごと
世のさま〴〵を見せしめき
このかなしみは吾胸の
深き底より湧き上り

遠きいくさに行くべきを
はなたじとこそとゞむなれ

母

けにしがらみのせきとめて
流れもあへぬ谷川の
そのかなしみのあらかたも
われはとくより知れるなり

さばかくまで言ひはりて
軍の旅を厭ひなば
その暁やかならむ
思ふも苦しい罪人と
名にも呼ばれてあさゆふべ
暗き牢獄の窓によりて

星の光を見るの外
身に添ふ影もあらざらん
見よ花深き川岸に
むつまじかりしまどゐさへ
させる嵐のさわぎなば
家のむつびもたのしみも
一夜のうちに破れなむ

人はこの世に生れきて
得しらぬ途を行くなれば
けにさまざまの山河を
越ゆべき旅の身なるぞや

われも思へば前髪の
まだ初花のむかしより

はやも命の傾きて
秋の霜ふるこの日まで
あるは行くへの雲深く
道なき森に迷ふごと
光もなくて明くる日は
空行く鳥を望み見て
張れる翼を羨みし
その暁も多かりき
あるはなやめる旅人の
夏の緑の蔭に行き
清める泉をむすぶごと
けに絶えなんとばかりにて
またも生命にかへりてし
その夕暮も多かりき

なあやまりそ
あゆむに難き世の路を
見よ人の行く旅路には
入るべき道のありながら
出づるにかたき谷間の
多かるとこそ聞くものを
あゝうらわかき旅人の
かゝるほとりに分け入りて
また歸りこぬためしさへ
世にさわなりとしるやしらずや

三　鍛冶の家にて

つかひの老婆
望はむなし待人の
影はそれとも見えざりき

鍛冶のむすめ
梭もつわざにたへかねて
ゆふぐれ窓によりつゝも
汝が歸りこん時をだに
待ちわびてしはあだなりや

老婆

かの蔭深き綠葉の
柳のほとり尋れゆき
人やきたると待ちしかど
風は空しく川岸の
草のおもてを渡るのみ
尋ぬる影はあらざりき

青きみそらに迷ひゆく
雲と雲との絶間より
夕日もはれて利根川の
水に光彩を沈めつゝ
黄金の色は川波の
ゆくへはるかに輝くも
尋ぬる人はあらざりき

ゆふべにかゝる明星の
いとゞさやかにあらはれて
深き光は夏の日に
ふたゝびしらぬ空の花
影はかなたの野の家の
屋根を帶びつゝきらめくも
尋ぬる人はあらざりき
やがて川邊にたちこめし
狹霧のうちに閉されて
空しく歸る渡しもり
ゆるき流れに棹さして
舟やる音は夕暮の
さみしき空にひゞけども
尋ぬる人はあらざりき

むすめ

あゝなつかしき夕暮を
人待つ時といふとかや
天の河原に彦星の
たなばたづめと相逢ふも
さみしく更けし夜半ならで
そは夕暮のころとかや
まだ暮れはてぬけふなれば
人待つ望みのこるらん
今一度はいでゆきて
岸のほとりを尋ね見よ

老婆

はや花草の影暗く
ねぐらにいそぐ鶏は

澤邊を歸る雛鳥の
そのかず〳〵を呼ぶぞかし
竹の林のかなたには
羽音さびしき旅鴉
雲を望みて飛び行くは
群に別れて迷ふなるらん

むすめ

一

門田にいでゝ
草とりの
身のいとまなき
晝なかは
忘るゝとには

あらねども
まぎるゝすべぞ
多かりき

二

夕ぐれ梭を
手にとりて
こゝろ静かに
織るときは
人の得しらぬ
思こそ
胸より湧きて
流れけれ
あすはいくさの

門出なり
遠きいくさの
門出なり
せめて別れの
涙をば
名残にせんと
願ふかな

四

君を思へば
わづらひも
照る日にとくる
朝の露
君を思へば
かなしみも

緑にそゝぐ
夏の雨

五

君を思へば
闇の夜も
允をまとふ
星の空

君を思へば
浅茅生の
荒れにし野邊も
花のやど

六

胸の思ひは

つもれども
吹雪はげしき
こひなれば
君が光に
照らされて
消えばやとこそ
恨むなれ

四　林の中

農夫　時はせまりぬ利根川の
水の流れに舟浮けて
都のかたに行く人を
はや岸の邊に待つならむ
なかなしみそ今は我れ
すでに心を定めたり
これより遠きもろこしの
軍の旅に行くべきぞ

むすめ　けふ別れてはいつかまた
相逢ふまでの名殘そや
あゝ人去りて鳥なかば
鳥の行くへに花さかば
花の色香によそへつゝ
なれにし岸の草の
上にすわりて汝がため
幸あれかしと祈らなむ

農夫　思へばわれはこの日ごろ
あだなる夢に迷ひつゝ
かりそめならぬ汝が身を
あやまりしこそうたてけれ

むすめ
さらば二人のなにしをば
あだなる夢と思ふかや

農夫
さなり波たつ海原の
底はありとも吾戀は
そこひ知らずとかこちつゝ
汝になけきしけふまでを
あだなる夢と思ひてよ
あゝあやまりて我は早や
汝に戀する心なし
けにおろかしきわがために
汝が身の花はつながれて

行くべきかたに得も行かず
いくその時を經てしぞや
なあやまりそかなしみそ
すでに冷たき石なれば
戀は用なき吾身なり
めぐみは深きたちねに
行きてまことをつくせかし

むすめ
その言の葉の底をだに
汲みしらじとにあらねども
あゝ汝は吾生命なり
われは生命に離れたり
たゞ忘れじとひとことの

頼むべきだにありもせば
いかに苦しきなやみをも
われは汝ゆゑ忍ぶべし
いかにさかしき世の人の
笑ひはすとも聞き入れじ

さるをつれなき言の葉に
痛みを胸に残しつゝ
かくて互に別れなば
われはたとへば白百合の
人に折られし花のごと
今は道邊に捨てられて
いとすみやかに萎れなむ

人の望みと願ひとに

満つるかぎりはあらねども
汝夫となり父となり
われ妻となり母となり
世にある上はかくてこそ
縁の甲斐もありけめを
かゝる命運は朽ちてゆく
かよわき人の身の常か

農夫

汝あやまれりあやまれり
處女の胸の花一枝
二つとはなき色香ぞや
かりそめならぬ汝が身の
寶を深く藏めてよ
あゝ心せよおろかしき

われは蟲にも劣る身ぞ
空に翅をうちのべて
思ひのまゝに舞ふ鷹も
人と生れし我よりは
賢き術を知るぞかし

はや川岸のかなたにて
喇叭の響きこゆるは
舟のよそほひとゝのひて
呼ぶにやあらんあゝさらば
遠き軍に出でたちて
命さだめぬ身なれども
軍の神のみめぐみに
われもほまれは揚げなむを
さらば汝やもたらちねの

深きめぐみをあだにせで
ゐにしもあらばよきかたに
末榮ある身を立てよ

むすめ

逢ふ時あれば二人また
別るゝ時のありぞとは
ことわりしらぬ身ならねど
かくも惜めば惜まるゝ
われら二人の名殘かな
さらば再びかへりきて
戰がたりをなさんまで
國ことなれる春秋の
雨と風とを厭ひてよ
劍の影の霜さえて

戰の野邊は寒くとも
かのほまれあるつはものゝ
猛きわざには劣りそよ
あゝ利根川の水のごと
柳のかげのあさゆふべ
胸小休なき吾身より
涙は汝がかたに流れん

下のまき

一　緑の樹かげにて

農夫

はや二とせは過ぎにけり
軍の旅の寢覺には
曉空に吹きすめる
喇叭の聲をきくごとに
思ひ浮べし故郷の
今はうれしく見ゆるかな

金州城の秋深く
籬の影の暗き夜は
露營の霜の寒さより

また椅子山のたゝかひの
彈丸の霰のたばしりて
照る日も暗きさまでを
わがなつかしき故郷の
人に告げなばいかならむ

夕顏白き花影に
祝の酒を汲まむとき
心雄々しき吾父は
いかに眼をきらめかし
白髮長きわが叔父は
いかに耳をばそばだて
わが說きいづる二とせの
戰がたりを聞くならむ

あゝなつかしの古里よ
流れかはらぬ利根川よ
遠く筑波の青山の
聳ゆるかたの雲間より
萬代おなじ白き日の
光はもれて山川を
もとのまゝにも照すかな

あゝなつかしの古里よ
國を立ちいで春秋の
長き夢をば重ねつゝ
今歸りきて佇立めば
樹蔭はもとのふかみどり
梅の梢に葉がくれて

鳴く鳥の音もこゝちよや
さてもかなたの川岸の
深き並樹のかげにして
風さそひくる音やなに
きけば響銅の鐃鈸の
うき世にありしかなしみを
うき世の外に傳ふるは
いかなる人の野邊おくり

六道の松明紙の旗
すでに綠に隱れたり
靜かに行くをながむれば
白き楊の木下かげ
晝かゞやかす白張の
亡き人送るともしびは

火影動きて靈魂の
行くへをいかに照らすらん
香のけふりも愁ひつゝ
天にのぼるに似たりけり
そなへの花も悲みて
地に仆るゝに似たりけり

無禮はゆるせ影見えし
若き聖にことゝはむ
そも誰人のなきがらを
こは送りゆく群ならん

僧

水靜かなる利根川の
流れの岸に生れてし

鍛冶のおとめと聞きしかど
その名は君よ思ひでず

けに絶えがたき戀をしも
味はふ人のある世かな
かれも浮きたる心より
花さきにほふあさゆふべ
岸邊の草にたづさはり
水の流にかはらじと
契れる人のありしなり

そは數ふれば夏の夜の
星より多きためしかな
行くへも遠く別れては
遂に逢瀬の絶えしより

若き命にさきいでし
心の春の花さへも
いつしかいとゞいたましき
わづらひとこそかはりけれ

ふたゝび桃はさきかへり
ふたゝび堇にほへども
人は空く歸らねば
戀のなやみに朽ちはてゝ
世にすぐれたるたをやめの
恨みやいかに長からん

農夫

それはまことか吾胸は
深き傷みを覺えたり

さはれひと〳〵待つらんを
いざや家路にいそがなむ

僧

われあまたゝび萬性に
高き御法を説きしかど
かくまで人をうごかせし
しるきためしはあらざりき
げに西風の吹けるとき
飛び散る秋の葉のごとく
思へばかれのかほばせは
死灰の色にかはりつゝ
その口唇はうちそよぐ
葦の一葉にまがひけり

あゝ大麥の青々と
たわにみのりし畠中に
彼のゆくへをながむれば
死してくだくる人のごと
さても穂かげに仆れけむ
姿は見えず麥にうもれて

小女

一

ゆきてとらへよ
大麥の
畠にかくるゝ
小兎を

二

われらがつくる
麥畠の
青くさかりと
なるものを

三

たわにみのりし
穗のかげを
みだすはたれの
たはむれぞ

四

麥まきどりの
きなくより

丸根に雨の
かゝるまで

五

朝露しげき
星影に
片さがりなき
鍬まくら

六

ゆふづゝ沈む
山のはの
こだまにひゞく
はたけうち

七

われらがつくる
麥畠の
青くさかりと
なるものを

八

ゆきてとらへよ
大麥の
畠にかくるゝ
小兎を

二深夜

農夫

小夜ふけにけりたゞひとり
流れに沿ふて照る月の
影を望めば白銀の
みそらの弓につがひてし
高き光の矢は落ちて
わが小休なき胸を射る

草木も今や沈まりて
晝の響は絶えにけり
世のあらそひもわづらひも

深き眠りにつゝまれて
いとゞ楽しき夏の夜の
短かき夢に入りにけり
風呼び起し雲に乗る
高光りますすめろぎも
剣をぬきてたちて舞ふ
猛き心のますらをも
今は静かに枕して
おさなごのごと眠るらん

晝も夜もなく行く川の
聲なきかたを眺むれば
羽袖もいとゞ力なく
空しき水に飛ぶ螢
あゝそのかけは亡き人の

香の魂か汝もまた
ありし昔の思ひ出に
岸邊の草に迷ふらん

あふるゝばかり湧きいづる
血潮と遠き望みとは
また絶えがたきかなしみの
そのしがらみにせかれつゝ
うたゝ苦しき煩悶を
人にはつゝみかくすとも
あふげば深く吾胸に
さし入る月の光には
けに覆ふべき影もなし

なにを心の柱とし
なにを吾身の宿とせむ
忍ぶとすれど夜の月の
空行くかげを見るときは
萬事の映る心地して
涙流れてとゞまらず
時には親もはらからも
家も寶も捨てはてゝ
世のあざけりと身の恥辱を
思ふいとまのあらばこそ
すがりとゞむるものあらば
蹴落すまでも破りいで
行くへも知らず黒雲の
風に亂れて迷ふごと
またはいざよふ大舟の

海に流れて落つるごと
または秋鳴く雁がねの
ひとりみそらに飛べるごと
身はよるべなくうらぶれて
道なき野邊に分けて入り
あるは身に添ふ光なく
遠き浦邊にさまよひて
知る人もなき花草に
埋れはてんと思ふなり

時にはたえて人の世の
響かよはぬ寺に入り
紅き涙を黒染の
衣の袖につゝみつゝ
光をまとふみ佛の

靈机の前にひざまづき
風吹く時は曉の
讀經に夢を破りすて
雨ふる時は夕暮の
鐘に心を澄ましつゝ
よしや苦しき雪山の
氷を胸にそゝぐとも
身にまつはれるかなしみを
のがれいでんと思ふなり

時には早く死にうせて
朽つる形骸をひきはなれ
たゞ靈魂の身となりて
暗き幽府に迷ひゆき
かの亡き人と亡き我と

魂と魂とは抱き合ひ
いかに他界の風吹きて
われら二人を飛ばすとも
いかに不斷の火はもえて
われら二人を焼くとても
二人の魂は常闇に
離れじ朽ちじ亡びじと
契らまほしく思ふなり

けにその昔ふたりして
樂しく仰ぎ見し時も
今は心の萎れつゝ
涙にぬれて見る時も
同じ光にかゞやきて
落ちて聲なき月の影

（一番鶏の聲きこゆ）

鶏鳴きぬ指をりて
その聲々を數ふれば
眠りの墓にとざされて
深く沈めるこの夜やも
はや生命あるかの日にぞ
よみがへるらん

いつまでか
かくてあるべき嗚呼われは
今は心を定めたり

わが黒髪はぬれ亂れ

わが唇はうちふるふ
胸の傷みに堪へかねて
くるしきさまをたとふれば
枝に別れて落つる葉の
疾しき風に隨ひて
たゞよふ身こそ悲しけれ

力烈しきいかづちの
ふるふがごとくわが魂は
いたくもふるひわなゝきて
思ひなやめる吾胸の
舊き望みは絶えにけり

あゝわづらひを盛り入れし
身は盃に似たりけり

流れて落つる河波よ
汝も流れのきはみまで
行きなば行きね遠海に
落ちなば落ちねわれもまた
おもひひとしく溢れいで
この盃を傾けむ

誰か破れにし古瓶に
みどりの酒をかへすべき
誰か波うつ磯際に
流るゝ砂をとゞむべき
さらばこれより亡き人の
家のほとりを尋ね見て
雲に浮びて古里を

のがるゝ時の名殘にもせむ

三　鍛冶の家のほとりにて

鍛冶

一

寶はあはれ
碎けゝり
さなり愛兒は
うせにけり
なにをかたみと
ながめつゝ
こひしき時を

忍ぶべき

二

ありし昔の
香ににほふ
薄はなぞめの
帶よけむ
麗はしかりし
黑髪の
かざしの紅き
珠よけむ

三

帶はあれども
老が身に

ひきまとふべき
すべもなし
珠はあれども
白髪は
うちかざすべき
すべもなし

四

ひとりやさしき
面影は
眼の底に
とゞまりて
あしたにもまた
ゆふべにも
われにともなふ

おもひあり

五

あゝたへがたき
くるしみに
おとろへはてつ
爐前に
仆れかなしむ
をり〳〵は
面影さへぞ
力なき

六

われ中槌を
うちふるひ

ほのほの前に
はけめはや
胸にうつりし
亡き人の
語らうごとく
見ゆるかな

七

あな面影の
わが胸に
活きて微笑む
たのしさは
やがてつとめを
いそしみて
かなしみに勝つ

生命なり

八

汗はこひしき涙なり
勞働は活ける思なり
いでやかひなの折るゝまで
けふのつとめをいそしまむ

農夫

歌ふをきけばいさましや
さてもその歌なつかしや

枕をうちてよもすがら
なけきあかせしものならで
誰かゝくまでなつかしき
歌の心を思ふべき

さなり大方世の常の
親のさばかりいとし子を
傷む心に沈みなば
たゞひたすらに悲哀の
涙にぬれつこがれつゝ
心碎けつありなんを
または命をはかなみて
夢に驚く心より
哭きたをるゝ曉は
活ける血潮も枯れなむを

汗はこひしき涙とや
勞働は活ける思とや
たゞかなしみに掩はれて
利根の岸なる古里に
かへりし日より鋤鍬を
手に持つ力なきものを
流るゝ汗のしたゝりて
かの白髪はぬるゝまで
烈火なかはれる紅烙や
濃青に見ゆる純鐵の
やがてば流るる紅色
うてるゝ鐵滓の
光とつむせび散ら中槌の散れ
ひとなりて

力をふるふ雄々しさよ
けにいさましや亡き人の
そのたらちをのかくまでも
今の力に鞭ちて
昨日の夢と戰へる
活ける姿にくらぶれば
われかなしみの墓深く
はやも小暗き穴に入り
若き命はありながら
埋れ朽つるに似たるかな
あゝあやまちぬ年老いて
霜ふる髪は亂れつゝ
流るゝ汗にうるほふも

手には肩をしぼりきて
烈火にむかふ人のごと
われもふたゝび利根川の
岸のほとりの青草の
しけれるかたに小田うちて
雄々しき心かきおこし
うれひに勝ちて戰ほむ

さなり朧の春の夜の
その一時の夢を見て
たゞ花に醉ふ蝶のごと
はかなくてのみ過す日は
すでに昔となりにけり
今は綠の樹の蔭に
かの智慧の葉の生ひ茂り

活ける潮は流れきて
ゆふべの夢を洗ひつゝ
動ける蟲は巢を出でゝ
草のしげみにはひめぐり
力あふるゝ姿こそ
げにこのごろの夏なれや

望みをさそふ朝風は
樹々の梢をわたりけり
あゝよしさらば白百合の
花さきにほふ川岸の
故の園に立ち歸りみん

夏草の後にしるす

保福寺峠鳥居峠を越えて木曾に入りしはこの夏七月の中旬なりき。福島の高瀬氏はわが姉の嫁ぎたるところにて、家は木曾川のほとりなる小丘に倚りて立てり。門を出でゝ見れば大江滔々として流る。われこの家にありて、峨々たる高山の壯觀に接し、淙々たる谿谷の深聲を耳にし、露たのしく風すゞしきあした、又は雨さびしく鳥なかしき夕、興に乘じてつゞりなせる夏の日のうたぐさを集めたるはこのふみなり。

八月木曾川の岸にはうるひ、露菊のたぐひさきて、山には石斛、岩千鳥、鷺草など咲きいでゝ、さすが名に負ふ谷間のことなれば、異花の

奇香を放つもの少なからず。河鹿なく聲も稀になりゆきて、桑摘の鄙歌おもしろく聞ゆるころより、高瀬氏の後園には草花のながめことにうれしく、九月に入りては白壁のかげなる秋海棠の花もさき出でぬ。われは朝夕この花園に逍遙するの樂みありければ、枝たわゝなる夏梨のかげ、葡萄棚のもと、または百合畠の間などにありて、海の如き青空に夏雲の往來するを望み、もしくは夕顔棚のほとりにありて、老いたる農夫と共にいつはり薄き風俗のさま、祭の夜の賑かさ、耕作の上のことなど語りつゝ田舍風情を味ひき。

舊暦七月十五夜には月ことにあかくこの谿谷にさし入りぬ。われは家族と共に今昔の物語を樂みたりき。甥なるひとはわれと年僅に三つばか

殆とまことのはらからのごとりたがひたれば、常に起臥を同ふして、共に讀み共に語り、なにくれとこゝろづけくるゝ情のほどもうれし。家には昔より傳はれる古畫古書または陶器漆器香具のたぐひなど少なからず、われはこれがために好古の性癖を擅にせしのみか、また藏に納めたる圖書を見るの樂みも多かりき。このふみは高瀨氏と姉とのたまものといふべきなり。

けに、美妙なる色彩に眩惑せられて内部の生命の捉へ難きを思ふ時、人力の薄弱にして深奥なる自然を透視するの難きを思ふ時、藝術の愛慕足らざるを思ふ時、古人がわが詩を作るは自己を鞭つなりといへる言の葉の甚深なるを嘆ぜずんばあらず。夏草はわが自ら責むるの兒にすぎざるのみ。

落梅集

鸕鷀杓鸚鵡杯
百年三萬六千日
一日須傾三百杯
遙看漢水鴨頭綠
恰似葡萄初醱醅
此江若變作春酒
壘麴便築糟丘臺
千金駿馬換小妾
笑座雕鞍歌落梅
車傍側掛一壺酒
鳳笙龍管行相催

李青蓮

一——千曲川旅情の歌

小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす繁蔞は萠えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香も知らず
淺くのみ春は霞みて

麥の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

千曲川のほとりにて

昨日もまたかくてありけり
今日もまたかくてありなむ
この命なにを離離
明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の
消え殘る谷に下りて
河波のいざよふ見れば
砂まじり水卷き歸る

嗚呼古城なにをか語り

岸の波なにをか答ふ
過ぎし世を靜かに思へ
百年もきのふのごとし

千曲川柳霞みて
春淺く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて
この岸に愁を繫ぐ

勞働

一朝

朝はふたゝびこゝにあり
朝はわれらと共にあり
埋れよ眠行けよ夢
隠れよさらば小夜嵐
諸羽はうちふる鶏は
咽喉の笛を吹き鳴らし
けふの命の戰鬪の
よそほひせよと叫ぶかな

野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ
雲に鞭うつ空の日は
語らず言はず聲なきも
人を勵ます其音は
野山に谷にあふれたり
流るゝ汗と膩との
落つるやいづこかの野邊に
名も無き賤のものゝふを
來りて護れ軍神

野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋と結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

あゝ綾絹につゝまれて
爲すよしも無く寢ぬるより
薄き襤褸はまとふとも
活きて起つこそをかしけれ

匍匐ふ蟲の賤が身に
羽翼を惠むものや何
酒か涙か歎息か
迷か夢か皆なあらず

野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋と結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

さながら土に繋がるゝ
重き鎖を解きいでゝ
いとゞ暗きに住む鬼の
苔の責をいでむ時

口には朝の息を吹き
骨には若き血を纏ひ
胸に驕慢手に力
霜葉を履みてとく來れ

野に出でよ野に出で
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋と結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

二畫

誰か知るべき秋の葉の
落ちて樹の根の埋むとき
重く聲無き石の下は
清水溢れて流るとは

誰か知るべき小山田の
稲穂のたわに實るとき

花なく香なき賤の胸
生命踊りて響くとは

共に來て時き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穂を

血潮は草に流さねど
力うちふりぬ鍬をうち
天の風雨に雷霆に
わが闘ひの跡やこゝ

見よ日は高き青空の
端より端を弓として

今し父の矢母の矢の
光を降らす眞晝中

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ稲の穂を

左手に稲を捉む時
右手に利鎌を握る時
胸滿ちくれば火のごとく
骨と髓との燃ゆる時

土と塵埃と泥の上に
汗と膩の落つる時

綠にまじる黄の莖に
烈しき息のかゝる時

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穂を

思へ名も無き賤ながら
遠きに石を荷ふ身は
夏の白雨過ぐるごと
ほまれ短き夢ならじ

生命の長き戰鬪は
こゝに音無し聲も無し

勝ちて桂の冠はわづかに白き頬かぶり

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穗を

三 暮

揚げよ勝鬨手を延べて
稲葉を高くふりかざせ
日暮れ勞れて道の邊に
倒るゝ人よとく歸れ

彩雲や
落つる日や
行く道すがら眺むれば
秋天高き夕まぐれ

共に蒔き
共に植ゑ
共に稲穗を刈り乾して
歌ふて歸る今の身に
ことしの夏を
かへりみすれば
嗚呼わが魂は
わなゝきふるふ
この日怖れをかの日に傳へ
この夜望みをかの夜に繋ぎ
門に立ち

野邊に行き
ある時は風高くして
青草長き谷の影
雲に嵐に稲妻に
行先も暗く聲を呑み
ある時は夏寒くして
山の鳩啼く森の下
たまゝ虹に夕映に
末のみのりを祈りてき
それは逝き
これは來て
餓と涙と送りてし
同じ自然の業ながら
今は思ひのなぐさめに
光をはなつ秋の星

あゝ勇みつゝ踊りつゝ
諸手をうちて笑ひつゝ
樹下の墓を横ぎりて
家路に通ふ森の道
眠る聖も盗賊も
皆な土くれの苔一重
霧立つ空に入相の
精舍の鐘の響く時
あゝ驕慢と歡喜と
力を息に吹き入れて
勝ちて歸るの勢に
揚はよ樂しき秋の歌

常盤樹

あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな
其枝に懸る朝の日
其幹を運る夕月の
なるや
など行く旅の迅速なるや
なるや
など電の影と馳するや
蝶の舞
花の笑

など遊ぶ日の世に短きや
など其醉の早く醒むるや
蟲草の葉に悲めば
一時にして既に霜
鳥潮の音に驚けば
一時にして既に雪
木枯高く秋落ちて
自然の色はあせゆけど
大力天を貫きて
坤軸遂に靜息なし
ものみな速くうらがれて
長き寒さも知らぬ間に
汝千歳の時に嘯き
獨り立つは何の力ぞ
白銀の花霏々として

吹雪の煙闇き時
四方は氷に閉されて
江海も音をひそむ時
汝が緑の蔭も朽ちせず
空を凌ぐは何の力ぞ
立てよ友なき野邊の帝王
ゆゝしく高く立てよ常盤樹
汝の長き春なくば
山の命も老いなんか
汝の深き息なくば
谷の響も絶えなんか
あしたには葉をうつ霰
ゆふべには枝うつ霰
千草も知らぬ冬の日の
嵐に叫ぶうきなやみ

いづれの日にか
氷は解けて
其葉の涙
消えむとすらん
あゝよしさらば枝も摧けて
終の色の落ちなん日まで
雲浮かば
無縫の天衣
風立たば
不朽の緒琴
おごそかに
立てよ常盤樹
あら雄々しきかな傷ましきかな
かの常盤樹の落ちず枯れざる
常盤樹の枯れざるは

百千の草の落つるより
傷ましきかな

寂寥

岸の柳は低くして
羊の群の繪にまがひ
野薔薇の幹は埋もれて
流るゝ砂に跡もなし
蓼科山の山なみの
麓をめぐる河水や
魚住む淵に沈みては
鴨の頭の深緑
花さく岩にせかれては
天の鼓の樂の音
さても水瀬はくちなはの

かうべをあけて奔るごと
白波高くわだつみに
流れて下る千曲川

あした炎をたゝかはし
ゆふべ煙をきそひてし
駿河にたてる富士の根も
今はさびしき日の影に
白く輝く墓のごと
はるかに沈む雲の外
これは信濃の空高く
今も烈しき火の柱
雨なす石を降らしては
みそらを焦す灰けぶり
神夢さめし天地の

ひらけそめにし昔より
常世につもる白雪は
今も無間の谷の底
湧きてあふるゝ紅の
血潮の池を目にみては
布引に住むはやぶさも
翼をかへす淺間山

あゝ北佐久の岡の裾
御牧が原の森の影
夢かけめぐる旅に寢て
安き一日もあらねばや
高根の上にあか〳〵と
燃ゆる炎をあふぐとき
み谷の底の青巖に

逆まく浪をのぞむとき
かしこにこゝに寂寥の
その味はひはにがかりき

あな寂寥や其の道は
獸の足の跡のみか
舞ひて見せたる大空の
鳥のゆくへのそれのみか
さてもためしの燈火に
若き心をうかゞへば
人の命の樹下蔭
花深く咲き散りて
枝もたわゝの智慧の實を
味ひそめしきのふけふ
知らずばなにか旅の身に

人のなさけも薄からな
知らずばなにか移る世に
假の契りもあだならむ
一つの石のつめたきも
萬の聲をこゝに聽き
一つの花のたのしきも
千々の涙をそこに觀る
あな寂寥や吾胸の
小休もなきを思ひみば
あはれの外のあはれさも
智慧のさゝやくわざぞ是

かの深草の露の朝
かの象潟の雨の夕
またはカナンの野邊の春

またはデボンの岸の秋
世をわびゞとの寢覺には
あはれ鶉の聲となり
うき旅人の宿りには
ほのかに合歡の花となり
羊の友のわらべには
日となり星の數となり
麥に添ひ寢の農夫には
はつかねずみとあらはれて
あるは形にあるは音に
色にほひにかはるこそ
いつはり薄き寂寥よ
いづれいましのわざならぬ
さなりおもては冷やかに

いとつれなくも見ゆるより
深き心はあだし世の
人に知られぬ寂寥よ
むかしいましが雪山の
佛の夢に見えしとき
かりに姿は花も葉も
根もかぎりなき藥王樹
むかしいましが沅湘の
水のほとりにあらはれて
楚に捨てられしあてびとの
熱き涙をぬぐふとき
かりにいましは長沙羅の
鄂渚の岸に生ひいでゝ
ゆふべ悲しき秋風に
香ひを送る蕙の草

またはいましがパトモスの
離れ小島にあらはれて
歎き仆るゝひとり身の
冷たき夢をさますとき
かりに面は照れる日や
首はゆふべの空の虹
衣はあやの雲を着て
足は二つの火の柱
默示をかたる言の葉は
高きらつぱの天の聲

思へばむかし北のはて
舟路侘しき佐渡が島
雲に戀しき天つ日の
光も薄く雪ふれば

昆藍の風は吹き落ちて
梵音聲を驚かし
岸うつ波は波羅蜜の
海潮音をとゞろかし
朝霜ふれば袖閉ぢて
衣は凍る鴛鴦の羽
夕霜ふれば現し身に
八つのさむさの寒苦鳥
ましてや國の罪人の
安房の生れの梅陀羅が子を
あな寂寥や寂寥や
ひとりいましにあらずして
天にも地にも誰かまた
そのかなしみをあはれまむ

けに晝の夢夜の夢
旅の愁にやつれては
日も暖に花深き
空のかなたを慕ふとき
なやみのとけに責められて
袖に涙のかゝるとき
汲みて味ふ寂寥の
にがき誠の一雫

秋の日遠しあしたにも
高きに登りゆふべにも
流れをつたひ獨りして
ふりさけ見れば鳥影の
天の鏡に舞ふかなた
思ひを閉す白雲の

浮べるかたを望めども
都は見えず寂寥よ
來りてわれと共にかたりね

爐邊

散文にてつくれる卽興詩

あら荒くれたる賤の山住や顏も黑し手も黑し
すご〳〵と林の中を歸る藁草履の土にまみれ
たるよ

こゝには五十路六十路を經つゝまだ海知らぬ
人々ぞ多き

炭燒の烟をながめつゝ世の移り變るも知らで
谷陰にぞ住める

蒲公英の黃に蕗の花の白きを踏みつゝ慣れし

其足何ぞ野獸の如き

岡のべに通ふ跡には野苺の實を垂るゝあり摘
みて舌うちして年を經にけり

和布賣の越後の女三々五々群をなして來る呼
びて窓に倚りて海の藻を買ふぞゆかしき

大豆を賣りて皿の上に載せたる鹽鮭の肉鹽鮭
何の磯の香もなき

年々の曆と共に壁に煤けたる錦繪を見れば海
ありき廣重の筆なりき

爺は波を知らず婆は潮の音を知らず孫は千鳥

を鶏(にはとり)の雛かとぞ思ふ

たまくゝ伊勢詣のしるしにとて送られし貝の一ひらを見れば大わだつみのよろづの波を彫(きざ)めるとぞ言ひし言の葉こそ思ひいでらるれ

品川の沖によるといふなる海苔の新しきは先づ棚の佛にまゐらせて山家にありて遠く海草の香(か)をかぐとぞいふばかりなる

二——胸より胸に

めぐり逢ふ

君やいくたび

めぐり逢ふ君やいくたび
あぢきなき夜を日にかへす
吾命暗の谷間も
君あれば戀のあけぼの

樹の枝に琴は懸けねど
朝風の來て彈くごとく
面影に君はうつりて
吾胸を靜かに渡る

雲迷ふ身のわづらひも

紅の色に微笑み
流れつゝ冷ゆる涙も
いと熱き思を宿す

知らざりし道の開けて
大空は今光あり
もろともにしばしたゝずみ
新しき眺めに入らん

あゝさなり

君のごとくに

あゝさなり君のごとくに
何かまた優しかるべき
歸り來てこがれ佗ぶなり
ねがはくは開けこの戸を

ひとたびは君を見棄てゝ
世に迷ふ羊なりきよ
あぢきなき石を枕に
思ひ知る君が牧場を

樂しきはうらぶれ暮し

泉なき砂に伏す時
青草の追懷ばかり
悲しき日樂しきはなし

悲しきはふたゝび歸り
綠なす野邊を見る時
飄泊の追懷ばかり
樂しき日悲しきはなし

その笛を今は賴まむ
その胸にわれは息はむ
君ならで誰か飼ふべき
天地に迷ふ羊を

思より

思をたどり

思より思をたどり
樹下より樹下をつたひ
獨りして遲く歩めば
月今夜幽かに照らす
おぼつかなき春のかすみに
うち煙る夜の靜けさ
仄白き空の鏡は
俤の心地こそすれ

物皆はさやかならねど
鬼の住む暗にもあらず

おのづから光は落ちて
吾顏に觸るぞうれしき

其光こゝに映りて
日は見えず八重の雲路に
其影はこゝに宿りて
君見えず遠の山川

思ひやるおぼろ〳〵の
天の戸は雲かあらぬか
草も木も眠れるなかに
仰ぎ視て涕を流す

吾戀は河邊に生ひて

吾戀は河邊に生ひて
根を浸す柳の樹なり
枝延て綠なすまで
生命をぞ君に汲ふなる

北のかた水去り歸り
晝も夜も南を知らず
あゝわれも君にむかひて
草を藉き思を送る

吾胸の底のこゝには

吾胸の底のこゝには
言ひがたき祕密住めり
身をあけて活ける牲とは
君ならで誰かしらまし

もしやわれ鳥にありせば
君の住む窓に飛びかひ
羽を振りて晝は終日
深き音に鳴かましものを

もしやわれ梭にありせば

君が手の白きにひかれ
春の日の長き思を
その糸に織らましものを

もしやわれ草にありせば
野邊に萠え君に踏まれて
かつ靡きかつは微笑みて
その足に觸れましものを

わがなげき衾に溢れ
わがうれひ枕を浸す
朝鳥に目さめぬるより
はや床は濡れてたゞよふ
口唇に言葉ありとも

このこゝろ何か寫さん
たゞ熱き胸より胸の
零にこそ傳ふべきなれ

君こそは遠音に響く

君こそは遠音に響く
入相の鐘にありけれ
幽かなる聲を辿りて
われは行く盲目のごとし

君ゆゑにわれは休まず
君ゆゑにわれは仆れず
嗚呼われは君に引かれて
暗き他をはずかに捜る
たゞ知るは沈む春日の

目にうつる天のひらめき
なつかしき聲するかたに
花深き夕を思ふ

吾足は傷つき痛み
吾胸は溢れ亂れぬ
君なくば人の命に
われのみや獨ならまし
あな哀し戀の暗にはか
君もまた同じ盲目か
手引せよ盲目の身には
盲目こそうれしかりけれ

こゝろをつなぐ

しろかねの

こゝろをつなぐ銀の
鎖も今はたえになり
こひもまことともあすよりは
つめたき砂にそゝがまし
顔もうるほひ手もふるひ
逢ふてわかれをしむより
人目の關はへだつとも
あかぬむかしぞしたはしき
形となり添はずとも

せめては影と添はましを
たがひにおもふこゝすら
裂きて捨つべきこの世かな
おもかげの草かゝるとも
古りてやぶるゝ壁のごと
若し住まねば吾胸は
つひにくだけて荒れぬべし
一歩に涙五歩に血や
すがたかたちも空の虹
おなじ照る日にながらへて
永き別れ路見るよしもなし

黄昏

つと立ちよれば垣根には
露草の花さきにけり
さまよひくれば夕雲や
これぞこひしき門邊なる

瓦の屋根に烏啼き
烏歸りて日は暮れぬ
おとづれもせず去にもせで
螢と共にこゝをあちこち

枝うちかはす梅と梅

枝うちかはす梅と梅
梅の葉かげにそのむかし
鶏と鶏とし並び食ひ
われは君とし遊びてき

空風吹けば雲離れ
別れいざよふ西東
青葉は枝に契るとも
綠は永くとゞまらじ

水去り歸る手をのべて

誰れか流れをとゞむべき
行くにまかせよ嗚呼さらば
また相見んと願ひしか

遠く別れてかぞふれば
かさねて長き秋の夢
願ひはあれど陶磁の
くだけて時を傷みけり

わが髪長く生ひいでゝ
額の汗を覆ふとも
甲斐なく珠を抱きては
罪多かりし草枕

雲に浮びて立ちかへり

都の夏にきて見れば
むかしながらのみどり葉は
蔭いや深くなれるかな

わかれを思ひ逢瀬をば
君とし今やかたらふに
二人すわりし青草は
熱き涙にぬれにけり

罪なれば

物のあはれを

罪なれば物のあはれをこゝろなき身にも知るなり
罪なれば酒をふくみて夢に醉ひ夢に泣くなり

罪なれば親をも捨てゝ世の靴を忍び負ふなり
罪なれば宿を逐はれて花園に別れ行くなり

罪なれば双に伏して

紅き血に流れ去るなり
罪なれば手に手をとりて死の門にかけり入るなり

罪なれば滅び碎けて
常闇の地獄のなやみ
嗚呼、二人抱きこがれつ
戀の火にもゆるたましひ

風よ靜かに

かの岸へ

風よ靜かに彼の岸へ
こひしき人を吹き送れ
海を越え行く旅人の
群にぞ君はまじりたる

八重の潮路をかき分けて
行くは僅に舟一葉
底白波の上なれば
君安かれと祈るかな

海とはいへどひねもすは

皐月の野邊と眺め見よ
波とはいへど夜もすがら
綠の草と思ひ寢よ

もし海怒り狂ひなば
われ是岸に仆れ伏し
いと〳〵深き歎息に
其嵐をぞなだむべき

樂しき初憶ふ毎
哀しき終堪へがたし
ふた〻びみたびめぐり逢ふ
天つ惠みはありやなしや

あゝ綠葉の嘆をぞ

今は海にも思ひ知る
破れて胸は紅き血の
流るゝがごと滴るがごと

三——壯年

壯年

一 埋木

羽翼なければ繋がれて
朽ちはつべしとかねてしる
光なければ埋もれて
老いゆくべしとかねてしる

知る人もなき山蔭に
朽ちゆくこをば
牛飼ふ野邊の寂しさを
かくれがとこそ頼むなれ

埋もるゝ花もありやとて
獨り戸に倚りぬれば
ゆふべ空に眺むれば
牧場の草に春日暮れて
雨のふるまに

二國別

罪人と名にも呼ばれむ
罪人と名にも呼ばれむ
歸らじとかねて思へば
嗚呼涙さらば故郷

駒とめて路の樹蔭に
あまたゝびかへりみすれば
輝きて立てる白壁
さやかにも見えにけるかな

鬣は風に吹かれて
吾駒の歩みも遲し

愁ひつゝ蹄をあげて
雲遠き都にむかふ

戰ひの世にしあなれば
野の草の露と知れゝど
吾父の射る矢に立ちて
消えむとは思ひかけずよ

捨てよとや紙にもあらず
吾心燒くよしもなし
捨てよとや筆にもあらず
吾心折るよしもなし

そのねがひ親や古りたる
このおもひ子や新しき

つく〳〵と父を思へば
吾袖は紅き血となる

静息なく激ぎつ胸には
柵もなにかとゞめん
洪水の溢るゝごとく
海にまで入らではやまじ

はらからやさらば故郷
去ねよ去ねよ去ねよ吾駒
諸共に暗く寂しく
故の園を捨てゝ行かまし

三 佯狂

胡蝶の夢の人の身を
旅といふこそうれしけれ
常世に長き天地を
宿といふこそをかしけれ

青き山邊は吾枕
花さく野邊は吾衾
星縫ふ空は吾帳
さかまく海は吾緒琴

いづこよりとは告げがたし
いづこまでとは言ひがたし

いまの光いま嵐
来る歡樂哀傷の
人のさかりをかりそめに
夏といはんもおもしろや

あゝわれひとの知らぬ間に
心の色は褪せ易し
胸うち掩ふ綠葉の
若き命もいくばくぞ

かんばせの花紅き子も
あはれや早く翁顏
あるひは高く擊てれども
翅碎けて八重葬

あるひは遠く舞へれども
望は落ちて塵埃
譽も聲も浮ける雲
すぐれし才はいづこぞや
涙も夢も草の雨
流れて更に音も無し

思ふて誰か傷まざる
歩みて誰か迷はざる

人の命を兒童の
嘻戯と言ふは誰が言葉
賤も聖も丈夫も
兒童ならぬものやある

晝には晝に遊ぶべし
夜には夜に遊ぶべし
破りはつべき世ならねば
身は狂ふこそ悲しけれ

捨てつ拾ひつこの命
行きつ運りつこの環

四草枕

落葉松の樹はありとても
石南花の花さくとても
故郷遠き草枕
思はなにか慰まむ
旅寢は胸も病むばかり
沈む憂は醉ふがごと
獨りぬる夜の夢にのみ
たゞ夢にのみ山路を下る

五幻境

ふと目は覺めぬ五とせの
心の醉に驚きて
若きは是身をながむれば
吾春は老いにけり

夢の心地も甘かりし
昔は何を知れとてか
清しき星も身を呪ふ
今は何をか思へとや

剛愎なり吾さへも
折れて泣きしは戀なりき

荒き胸にも一輪の
花をかざすは戀なりき

勇める馬の狂ひいで
鬣長く嘶きて
風こゝちよき青草の
野邊を蹄に履むがごと

又は眼も紫に
胸より熱き火を吹きて
汲めど盡きせぬ眞清水の
泉に喘ぎよるがごと

若き心の躍りては
軛も綱も捨てけりな

これつ醉ひつ筆振れば
筆で神がありと思ひてき

あゝうつくしき花草は
咲く間を待たで萎むらん
消えはてにけり吾戀は
藝術諸共消えにけり

そは何故のうき世にて
人に誠はありながら
戀路の末はとこしへの
冬を性命に刻むらむ

黑髪われを覆ふとも
血潮はわれを染むるとも

花口唇を飾るとも
思は胸を傷ましむ

繪筆うちふる吾指は
歎きのために震ふかな
涙に濡るゝ吾紙は
象空しく消ゆるかな

かはりはてたる吾命
かはりはてたる吾思
かはりはてたる吾戀路
かはりはてたる吾藝術

この世はあまり實にすぎて
あたら吾身は夢ばかり

なぐさめもなき幻(まぼろし)の
境(さかひ)に泣てさまよふわれは

六邂逅

縫(ぬ)ひかへせ
賦(ふ)に染(そ)みし
涙(なみだ)に濡(ぬ)れし
濯(すす)けよさらば

縫(ぬ)ひかへせ
其(そ)の袂(たもと)
其(そ)の袂(たもと)
敷(しき)かずもがな

縫(ぬ)ひかへせ
君(きみ)が衣(ころも)を縫(ぬ)ひかへせ
愁(うれひ)は水に汗は瀨(せ)に
濯(すす)けよさらば敷(しき)かずもがな

縫(ぬ)ひかへせ
縫(ぬ)ひかへせ
縫(ぬ)ひかへせ
捨てよ昔の夢(ゆめ)の垢(あか)

澤やめよ
げよ
さ甲斐
らなき
ば物思
歎かず
かもがな

縫ひかへせ
腐れて
勞れて何
げよ何の
澤さらば袖
げよ縫ひ
かあ
ずるかへ
かもがな

縫ひかへせ
薄きらも
羽世に
袖かず
澤をもがな
げ蟬
よ縫ひ
さ殼
らすか
ば出せ
歎づ
かる
ず世
歌
ふ
て
さ
ら
ば
歎
か
ず
もがな

縫ひかへせ
ひたりや
君がなげきは古りたりや

とく新しき世に歸れ
澤げよさらば歎かずもがな

四―椰子の實、其他

椰子の實

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

舊の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕
孤身の浮寢の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば
新なる流離の憂

海の日の沈むを見れば
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐々
いづれの日にか國に歸らん

浦島

浦島の子とぞいふなる
遊ぶべく海邊に出でゝ
釣すべく岩に上りて
長き日を糸垂れ暮す

流れ藻の青き葉蔭に
隱れ寄る魚かとばかり
手を延べて水を出でたる
うらわかき處女のひとり
名のれ〳〵
わだつみに住める處女よ
奇しき處女よ

思ひきや水の中にも
黑髮の魚のありとは

かの處女嘆きて言へる
われはこれ潮の兒なり
わだつみの神のむすめの
乙姫といふはわれなり

龍の宮荒れなば荒れぬ
捨てゝ來て海へは入らじ
あゝ君の胸にのみこそ
けふよりは住むべかりけれ

舟路

海にして響く艫の聲
水を撃つ音のよきかな
大空に雲は飄ひ
潮分けて舟は行くなり

靜なる空に透かして
青波の深きを見れば
水底やはてもしられず
流れ葉の浮きつ沈みつ

綠なす草のかげより
湧き出づる泉ならねど

おのづから滿ち來る汐は
海原のうちに溢れぬ

さながらに遠き白帆は
群をなす牧場の羊
吹き送る風に飼はれて
わだつみの野邊を行くらん

雲行けば舟も隨ひ
舟行けば雲もまた追ふ
空と水相合ふかなた
諸共にけふの泊へ

海邊の曲

うみべといへるしらべに合せてつくりしうた

よのわづらひをのがれいでつゝ、ひとりうみべにさまよひくれば、あゝはや、わがむねは、こひのおほなみ、こゝろにやすきひとゝきもなく、くらきうしほのうみよりいでゝ、あふれてきしにのぼれるみれば、つめたきかぜの、ゆめをふくとき、とゞめもあらずなみだしながる。

響りん〳〵 音りん〳〵

響りん〳〵 音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く
馬は蹄をふみしめて
故郷の山を出づるとき
その黒毛なす鬣は
冷しき風に吹き亂れ
その紫の兩眼は
青雲遠く望むかな
枝の綠に袖觸れつ
あやしき鞍に跨りて

馬上に歌ふ一ふしはげにや遊子の旅の情

あゝおさなくて國を出で
東の磯邊西の濱邊
さても繋がぬ舟のごと
夢長きこと二十年

たまくことし歸りきて
昔懷へば
蔭を岡邊に尋ぬれば
松柏すでに折れ碎け
徑を川邊にもとむれば
野草は深く荒れにけり

菊は心を驚かし

蘭は思を傷ましむ
高きに登り草を藉き
惆悵として眺むれば
槍原に迷ふ雲落ちて
涙流れてかぎりなし

去ねくかゝる古里はふたゝび言ふに足らじかし
あゝよしさらばけふよりは
日行き風吹き彩雲の
あやにたなびくかなたをも
白波高く八百潮の
湧き立ちさわぐかなたをも
かしこの岡もこの山も
いづれ心の宿とせば

しげれる谷の野葡萄に
秋のみのりはとるがまゝ
深き林の黄葉に　　
秋の光は履むがまゝ
響りん〳〵音りん〳〵
うちふりうちふる鈴高く
馬は首をめぐらして
雲に嘶きいさむとき
かへりみすれば古里の
檜原は目にも見えにけるかな

惡夢

少年の昔よりかりそめに相知れるなにがし、獄に繫がるゝことこゝに三とせあまりなりしが、はからざりき飛報かれの凶音を傳へぬ。今春獄吏に導かれて、かれを巣鴨の病床に訪ひしは、舊知相見るの最後にてありき、かれ學あり才あり、西の國の言葉にも通じ、宗教の旨をも味はひ知り、おほかたの藝能にもつたならず、人にも侮られまじき程の品かたちは持てりしに、其半生を思ひやれば實に慘苦と落魄との連鎖とも言ふべかりき。かれは春の長閑に暖かなる家庭に生ひたちて、希望と幸福とを一身に荷ひたりしかど、やがて獄窓に呻吟せしの日は人生流離の極みを盡したる後なりき、あはれむべし、死と狂と罪を除きて他にかれの行くべき道とてはあらざりしなり。われは今、かれが惡夢を憐むの餘り、一篇の蕪辭四人の愁ひをとりて、みだりに花鳥の韻等を穢す、罪の受くべきはもとよりわが期する所なり。

その耳は　いづこにありや
その胸は　いづこにありや
激り落つ　愁ひの思
この心　誰に告ぐべき

秋蠅の窓に残りて
日の影に飛びかふごとく
あぢきなき牢獄のなかに
伏して寢ねまたも目ざめぬ

夜な〳〵の衾は濡れて
吾床は乾くの間も無し
黑髪は霜に衰へ
若き身は歎きに老いぬ

春やなき無間の谷間
潮やなき紅蓮の岸邊
憔悴の死灰の身には
熱き火の燃ゆる罪のみ

銀の臺も碎け
戀の矢も朽ちて行く世に
いつまでか骨に刻みて
時しらず活くる罪かも

空の鷲われに來よと
なにかせん自在なき身は
天の馬われに來よとや
なにかせん鐵鎖ある身は

いかつちの火を吹くごとく
この痛み胸に踊れり
なかに罪の住家は
濃き陰の暗にこそあれ

いとをしむ人なき我ぞ
隠れむにものなき我ぞ
血に泣きて聲は呑むとも
寂寞の裾こそよけれ

世を知らぬおさなき昔
香にほふ妹を抱きて
すゝりなく恨みの日より
吾蟲は驕るばかり

わがいのち戯の臺
その悪を舞ふにやあらん
わがこゝろ悲しき鏡
その夢を見るにやあらん

人の世に羽を撃つ風雨
天地に身は捨小舟
今更に我をうみてし
亡き母も恨めしきかな

父いかに舊の山河
妻いかに遠の村里
この道を忘れたまふや
この空を忘れたまふや

いかなれば歎きをすらん
その父はわれを捨つるに
いかなれば忍びつ居らん
その妻はわれを捨つるに

くろがねの窓に縋りて
故郷の空を望めば
浮雲や遠くく懸りて
履みなれし丘にさながら

さびしさの訪ひくる外に
おとなひも絶えてなかりし
吾窓に鳴く音を聽けば
人知れず涙し流る

鴉より翅を振りて
黄葉の陰に歌ふか
幽囚の笞の責や
人の身は鳥にもしかじ

あゝ一葉枝に離れて
いづくにか漂ふやらん
照れる日の光はあれど
わがたましひは暗くさまよふ

夏の夢

また落ちかゝる白雨の
若葉青葉を過ぎてのみ
緑の野邊に蝶は來て
名もなき草の花ざかり

めぐり〳〵て藪かげを
ぬつと出づれば夏の日や
白き光に照らされて
すがたをつゝむ頰冠り

離れ〳〵の雲の行く
天の心は知らねども

蛙のうたふ聲きけば
今はよろづの戀の時

かよひなれたる白百合の
畠を荒す田鼠
小高き土をふみしめて
花さくなかを逢ひに行く

蟹の歌

波うち寄する磯際の
一つの穴に蟹二つ
鳥は鳥とし並び飛び
蟹は蟹とし棲めるかな

日毎の宿のいとなみは
乾く間もなき砂の上
潮引く毎に顕れて
潮満つ毎に隠れけり

やがて天雲驚きて
落ちて風雨となりぬれば

流るゝ砂と諸共に
二つの蟹の行衛知らずも

鳥なき里

鳥なき里の蝙蝠や
宗助鍬をかたにかけ
幸助網を手にもちて
山へ宗助海へ幸助

黄瓜花さき夕影に
蟬鳴くかなた桑の葉の
露にすゞしき山道を
海にうらむや幸助のゆめ

磯菜遠近砂の上に
舟干すかなた夏潮の

鯵藻に響く海の音を
山にうらやむ宗助のゆめ

かくもかはれば變る世や
幸助鍬をかたにかけ
宗助網を手にもちて
山へ幸助海へ宗助

霞にうつり霜に暮れ
たちまち過ぎぬ春と秋
のぞみは草の花のごと
砂に埋れて見るよしもなし

さながらそれも一時の
胸の青雲いづこぞや

かへりみすれば跡もなき
宗助のゆめ幸助のゆめ

ふたゝび百合はさきかへり
ふたゝび梅は青みけり
深き緑の樹の蔭を
迷ふて歸る宗助幸助

藪入

上

朝淺草を立ちいでゝ
かの深川を望むかな
片影冷しわれは今
こひしき家に歸るなり

籠の雀のけふ一日
いとまたまはる藪入や
思ふまゝなる吾身こそ
空飛ぶ鳥に似たりけれ

大川端を來て見れば

帶は淺黄の染模様
うしろ姿の小走りも
うれしきわれに同じ身か

柳の並樹暗くして
墨田の岸のふかみどり
漁り舟の艫の音は
靜かに波にひゞくかな

白帆を
鬘の井筒わたる風は來て
花あつまれる香を拂ひ
われに添ひつゝ浮草は
流れけり

潮わきかへる品川の

沖のかなたに行く水や
思ひは同じかはしもの
わがなつかしの深川の宿

下

その名ばかりの鮨つけて
やがて一日は暮れにけり
いまごひして見かへれば
蛟遣に薄き母の影

あゆみは重し愁ひつゝ
岸邊を行きて吾宿の
今のありさま忍ぶにも
忍ぶにあまる宿世かな

家をこゝろに浮ぶれば
夢も冷たき古簀子
西日悲しき土壁の
まばら朽ちたる裏住居

南の廂傾きて
垣に短かき草等
破れし戸に倚る夏菊の
人に昔を語り顔

風吹くあした雨の夜半
すこしは世をも知りそめて
むかしのまゝの身ならねど
かゝる思ひは今ぞ知る

身を世に思ひなげきつゝ
流れに添ふてあゆめばや
今の心のさみしさに
似るものもなき眺めかな

夕日さながら畫のごとく
岸の柳にうつろひて
汐みちくれば水禽の
影ほのかなり隅田川

茶舟を下す舟人の
聲遠近に聞えけり
水をながめてたゝずめば
深川あたり迷ふ夕雲

鼠をあはれむ

星近く戸を照せども
戸に枕して人知らず
鼠古巣を出づれども
人夢さめず驚かず

情の海の淡路島
通ふ千鳥の聲絶えて
やじりを穿つ盜人の
寢息をはかる影もなし

長き尻尾をうちふりつ
小踊りしつゝ軒づたひ
煤のみ深き梁に
夜をうかゞふ古鼠

光をいとひいとはれて
白齒もいとゞ冷やかに
籠の隅に忍びより
ながしに捜る鯵の骨

闇夜に物を透かし視て
暗きに遊ぶさまながら
なほ聲無きに疑ひて
影を懼れてきゝと鳴き鳴く

（終）

藤村詩集（定價貳圓）

明治三十七年九月一日印刷
明治三十七年九月四日發行
大正十四年九月十五日改訂增補百八十版

著作者　島崎春樹
著作權者　東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彥
東京市神田區松下町七番地
印刷者　佐藤磨
東京市神田區松下町七番地
印刷所　明治印刷株式會社
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
電話大手五一番
電話大手四二一〇番
振替口座東京一六一七番

春陽堂
版權所有

荻原井泉水著■野ざし紀行評釋（芭蕉文庫）金八十五錢 送料六錢

同著■芭蕉連句選釋（芭蕉文庫）金八十五錢 送料六錢

同著■初懷紙評註（芭蕉文庫）金八十五錢 送料六錢

島崎藤村著■藤村詩集（全詩集）金壹圓八十錢 送料十八錢

同著■佛蘭西紀行（旅行記）金壹圓七十錢 送料十八錢

同著■櫻の實の熟する時（長篇小說）金壹圓二十錢 送料十八錢

同著■新生 上下（長篇小說）各金壹圓八十錢 送料十八錢

同著■藤村創作選集 上下（小說集）上金壹圓三十錢 下金壹圓七十錢 送料十八錢

同著■淺草だより（感想集）金壹圓五十錢 送料十八錢

菊池寛著■合本慈悲心鳥（長篇小說）金貳圓二十錢 送料十八錢

同著■新珠 上、中、下（長篇小說）各金壹圓六十錢 送料十五錢

同譯述■妖姫（ルキユウ原作）金貳圓 送料十八錢

同著■道理（小說集）金壹圓 送料十三錢

同著■極樂（小說集）金壹圓 送料十三錢

同著■冷眼（小說集）金壹圓十錢 送料十三錢

同著■我鬼（小說集）金壹圓十錢 送料十三錢

同著■菊池寛戲曲全集（續々刊行）各金壹圓七十錢 送料十五錢

芥川龍之介著■春服（小說集）金壹圓二十錢 送料十三錢

久米正雄著■螢草（長篇小說）金貳圓四十錢送料十八錢

同著■山鳥（小說集）金壹圓六十錢送料十三錢

同著■金魚（小說集）金壹圓六十錢送料十三錢

同譯述■此悲惨（レミゼラブル）ユーゴー原作 金貳圓三十錢送料十八錢

谷崎潤一郎著■肉塊（長篇小說）金壹圓九十錢送料十八錢

同著■刺青外九篇（小說戲曲集）金貳圓送料十八錢

同著■潤一郎傑作全集（全五卷）各金貳圓五十錢送料十八錢

尾崎紅葉著■金色夜叉（長篇小說）金貳圓三十錢送料十八錢

長田幹彦著■續金色夜叉（長篇小說）金貳圓三十錢送料十八錢

長田幹彦著■金色夜叉終篇（長篇小說）金貳圓三十錢送料十八錢

同著■祇園（小說集）金壹圓七十錢送料十八錢

同著■港の唄（長篇小說）金壹圓五十錢送料十八錢

同著■霧（長篇小說）金貳圓送料十八錢

同著■大地は震ふ（短篇集）金壹圓五十錢送料十八錢

夏目漱石著■合本鶉籠、虞美人草（長短篇）金貳圓七十錢送料十八錢

同著■合本三四郎、それから、門（長篇集）金貳圓七十錢送料十八錢

同著■合本彼岸過迄、四篇（長短篇）金貳圓七十錢送料十八錢

同著■縮刷虞美人草（長篇小說）金貳圓二十錢送料十八錢

◈名家傑作集◈

各册金九十錢送料各六錢

第一篇■不言不語　尾崎紅葉氏著
第二篇■其面影　二葉亭四迷氏著
第三篇■照葉狂言　泉鏡花氏著
第四篇■處女作集　島崎藤村氏著
第五篇■白露紅露　幸田露伴氏著
第六篇■野の花　田山花袋氏著
第七篇■歸去來　國木田獨歩氏著
第八篇■十三夜　樋口一葉女史著
第九篇■五月幟　正宗白鳥氏著
第十篇■月夜の美感　高山樗牛氏著
第十一篇■彼女と少年　德田秋聲氏著
第十二篇■還魂錄　森鷗外氏著
第十三篇■歡樂　永井荷風氏著
第十四篇■油地獄　齋藤綠雨氏著